

令和3年度（第60回）農林水産祭  
第27回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」  
【東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和3年 12月9日（木） 13時30分～16時
場所	石垣記念ホール 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル9F
主催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和4年3月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

# 発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和3年12月15日（木）東京都港区の石垣記念ホールにおいて『東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者』をテーマに、平成2年度農林水産祭林産部門の天皇杯受賞者である「有限会社上原樹苗」の業績を取り上げて、約60名の参加の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い約40名の方にご視聴頂きました。）

このシンポジウムでは、農林水産省大臣官房の青山豊久技術総括審議官の主催者挨拶の後、まず、農林水産祭中央審査委員会林産分科会（信州大学工学部特任教授）の鮫島正浩主査からの選賞審査報告と「有限会社上原樹苗」の上原和直代表取締役からの業績発表が行われ、その後、鮫島主査をコーディネーターとして、業績発表者にコメントーターの中央審査委員会林産分科会（（公財）国際緑化推進センター技術顧問）の田中浩委員、年樹株式会社の星比呂志代表取締役、福島県林業研究センターの大槻晃太森林環境部長、林野庁国有林野部業務課の小口真由美課長補佐の4名を加えて、意見交換（ディスカッション）が行われました。

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和4年3月

公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和3年度（第60回）農林水産祭  
（第27回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール	1 頁
シンポジウム出席者	2 頁
受賞者の業績概要	3 頁
シンポジウムの記録	4 頁



令和3年度（第60回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者】

《スケジュール》

13:30~16:00

(敬称略)

- |   |   |           |                                      |       |
|---|---|-----------|--------------------------------------|-------|
| 1 | 開 | 会 (13:30) | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事                | 小栗 邦夫 |
| 2 | 挨 | 拶         | 農林水産省大臣官房技術総括審議官                     | 青山 豊久 |
| 3 | 選 | 賞         | 農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査<br>(信州大学工学部特任教授) | 鮫島 正浩 |
| 4 | 業 | 績         | 令和2年度林産部門天皇杯受賞<br>有限会社上原樹苗 代表取締役社長   | 上原 和直 |

・・・休憩 (14:30~14:40) ・・・

- 5 ディスカッション (14:40)  
(登壇者)
- ・コーディネーター  
鮫島 正浩 (3に同じ)
  - ・業績発表者  
上原 和直 (4に同じ)
  - ・コメンテーター  
田中 浩 (農林水産祭中央審査委員会林産分科会委員  
(公益財団法人国際緑化推進センター技術顧問))  
星 比呂志 (年樹株式会社代表取締役)  
大槻 晃太 (福島県林業研究センター森林環境部長)  
小口 真由美 (林野庁国有林野部業務課課長補佐 (技術開発・普及班担当))

(内容)

- ・意見交換、質疑応答
- ・総括

- 6 閉 会 (16:00)

第27回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R3.12.9（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	上原 和直	令和2年農林水産祭林産部門天皇杯受賞者 有限会社上原樹苗 代表取締役
コーディネーター 及び選賞審査報告	鮫島 正浩	農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 (信州大学工学部特任教授)
コメンテーター	田中 浩	公益財団法人国際緑化推進センター技術顧問
コメンテーター	星 比呂志	年樹株式会社代表取締役
コメンテーター	大槻 晃太	福島県林業研究センター森林環境部長
コメンテーター	小口 真由美	林野庁国有林野部業務課課長補佐（技術開発・普及 担当）
挨 拶	青山 豊久	農林水産省大臣官房技術総括審議官
司会・進行	小栗 邦夫	(公財) 日本農林漁業振興会 常務理事

## 林産部門

出品財 技術・ほ場（苗ほ）

有限会社上原樹苗  
（代表 上原 和直）

福島県南相馬市



### 1 地域の概要

南相馬市は、福島県の北東部に位置し、東北にありながら冬期間の降雪は殆どなく温暖で、夏は冷涼という寒暖差が少ない地域である。平成23年の東日本大震災で生じた津波により、当該地域沿岸部の多くが消失するなど、甚大な被害が発生した。

### 2 受賞者の取組の経過と経営の現況

有限会社上原樹苗は、明治初期に桑苗を生産したのが始まりで、昭和30年頃に造林用苗木の生産を開始した。東日本大震災で、社屋、苗畑及び各種機械の多くを津波で失う被害を受けながらも事業を継続し、コンテナ苗生産や作業の機械化等による効率化を進めた。その結果、被災前の年間生産量が150万本に対し、現在は200万本を超えており、本数・樹種数ともに他に類を見ない規模を誇る生産者となった。

### 3 受賞者の特色

#### （1）幅広い需要に応えた苗木生産

スギ、ヒノキ、カラマツ、クロマツを針葉樹の山行苗木として主に生産しているが、森林生態系の多様性に対応した苗木供給を目指し、緑化木等苗木も含めて、針葉樹・広葉樹を合わせ常時100種類以上の樹種を生産する体制を築いている。販売先も北海道から沖縄まで全国に渡っており、各地の多様な樹種の需要に応じている。また、針葉樹については、裸苗からコンテナ苗へ栽培方法を段階的に移行しており、令和元年度は山行本数の約90%がコンテナ苗になっている。

#### （2）女性の活躍

重量物を扱う作業は可能な限り機械化を図っているほか、女性専用の休憩施設や従業員用のシャワー室を設置するなど、男女問わず働きやすい環境作りに配慮した結果、正規雇用職員の約7割を女性が占めている。また、育児介護休業等規程など、従業員が長く働き続けることができるよう各種制度も整備している。

### 4 普及性と今後の発展方向

独自に最適化した培土の配合、作業機械や作業システムの改良、コンテナ苗や早生樹の育苗、栽培方法のデータベース化やマニュアル化等、様々な技術を保有した同社は、苗木生産者にとどまらず、造林・伐採を主とする事業体も含めて全国各地から視察を受け入れ、育苗技術の普及に努めている。苗木の供給だけでなく、地域の実情に応じた植栽樹種の提案等の森林づくり活動に関する情報発信など、苗木ビジネスの展開を牽引する立場として、今後更なる活躍が期待される。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

皆様、定刻になりましたので、ただいまから「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を担当いたします日本農林漁振興会、常務理事の小栗でございます。皆様には師走のご多忙中のところ、また引き続き、コロナ禍の懸念される中、ご参加いただき、誠にありがとうございます。また、本日は、オンラインでも、一方方向でございますが、視聴いただけるようにいたしました。慣れない設営でございますが、よろしく願いいたします。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀農家の事例の成果を関係の皆様方に広くお伝えすることによりまして、今後の農林水産業の発展のための一助になればと例年開催しているものでございます。

農林水産祭は、昭和37年に始まり、今年で60回目を迎える伝統ある行事でございます。このうち、表彰部門は現在七つに分かれており、過去1年間の各種のコンクールで大臣賞を受賞された、今年で言えば、約300の事例の中から厳正な審査を踏まえた上で、天皇杯、内閣総理大臣賞、それから農林漁業振興会会長賞のいわゆる3賞が授与されます。このうち特に天皇杯につきましては、我が国で天皇杯というものが全部で30下賜されておりますが、大部分はスポーツ関係でございまして、有名なのは正月の天皇杯のサッカーなどがございまして、この30のうち、七つが農林水産分野に与えられているわけでございますが、農林水産業がまさに国の礎であるということで、ご皇室の熱い思いをありがたく思っているところでございます。

今年も先月の勤労感謝の日、もともとは新嘗祭の日でございますが、今年の表彰式が行なわれました。本日は、昨年度、林産部門で天皇杯を受賞されました福島県の上原樹苗の上原様にお越しいただきました。実はコロナ禍で何度か順延をしてきたわけでございますが、ようやく今日、改めてお話をいただき、また学識経験者の方々と意見交換をしたいということでお願いしたところでございます。天皇杯受賞後にはいろいろお忙しくなったかと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めまして御礼とお祝いを申し上げる次第でございます。

それでは、本日は農林水産省からは大臣官房の青山技術総括審議官にご出席いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をよろしくお願いいたします。

**【挨拶】農林水産省大臣官房技術総括審議官 青山 豊久**

農林水産省技術総括審議官の青山でございます。令和3年度農林水産祭、優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、お忙しい中、多数の皆様にご参加いただきまして誠にありがとうございます。農林水産祭は天皇杯の授与など、優秀農林水産業者の表彰とその業績の普及を目的の一つとして実施しておりまして、このシンポジウムはその一環として開催していただいているところでございます。天皇杯は、先ほど小栗会長からご紹介がございましたが、全国で開催されております約300の品評会などの農林水産祭参加表彰行事におきまして、農林水産大臣賞を受賞された約400点の中から特に優秀なものに対して授与されるものでございまして、授与された方は全国の農林水産業者の皆様が目標とされるところでございます。

今回、発表いただきます有限会社上原樹苗様は、東日本大震災によって大きな被害を受けながらも事業を継続されまして、コンテナ苗の生産や作業の機械化などによる効率化を進め、針葉樹だけではなく、広葉樹を合わせ、約100種類以上の樹種を生産する体制を築かれまして、北海道から沖縄まで、各地の多様な需要に応えていらっしゃいます。また、地域の実情に応じました植栽樹種の提案など、森林づくりに関する情報発進を行なっております。本日はそのすばらしいご功績、業績についてお話を伺うわけですが、特に報告書などの書類だけではわからない部分でございますとか、その業績に関するさまざまな角度から意見交換をいただければと思っております。

本日のシンポジウムが関係者の皆様の今後のご活躍の一助となることをご期待申し上げまして、簡単ではございますが、私の挨拶といたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、これから議事に入ります。まず選賞審査報告でございます。審査委員会の林産分科会の主査であります信州大学教授の鮫島先生から審査報告をお願いいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 鮫島 正浩  
(信州大学工学部特任教授)

皆様、年末のお忙しいときにご参集いただきましてどうもありがとうございます。ただいま紹介をいただきました農林水産祭中央審査委員会の林産分科会でいま主査を担当しております鮫島でございます。

私から選賞審査報告をさせていただきます。

すでに小栗様からもご紹介があったかと思いますが、天皇杯を持っている顕彰事業は、スポーツ以外では農林水産祭の顕彰のみだそうです。大変価値のある顕彰制度で、昭和37年から国民的な祭典として行なわれている、そういう事業でございます。

それで、今年、平成3年度は60回目なのですが、今日の選賞審査報告、それからこの後のシンポジウムは、平成2年度、昨年度、59回のものについての選賞審査報告と業績報告になります。農林水産祭にはすでにご説明いただいたように選賞部門として七つございまして、その中で今日お話をするのは林産部門になります。選賞区分としては天皇杯、内閣総理大臣賞、それから日本農林漁業振興会会長賞、この三つがございます。

令和2年度の林産部門の選賞審査対象ですが、これは例年と同じですが、まず令和2年度の農林水産祭の参加行事が全国、各分野で行なわれていて、そこでまず農林水産大臣賞を受賞された方が対象になります。それで、令和2年度の場合、対象となった参加事業は28で、対象出品財数は58点でございます。さらに、出品財の対象となる分野が「経営」と「技術・ほ場」、それから「産物」がございまして、経営が2行事で9点。技術、ほ場が3行事で8点、産物が23行事で41点ございました。

### 農林水産祭とは

国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と（公財）日本農林漁業振興会の共催により、昭和37年から国民的な祭典として実施している顕彰制度で、令和2年度は59回目、令和3年度は60回目

#### ★ 農林水産祭選賞部門

- ① 農産・蚕糸 ② 園芸 ③ 畜産  
④ 林産 ⑤ 水産 ⑥ 多角化経営  
⑦ むらづくり \*女性の活躍

#### ★ 選賞区分

天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞  
\*女性の活躍については内閣総理大臣賞と日本農林漁業振興会会長賞  
\*天皇杯が授けられるのはスポーツ関係以外では農林水産祭顕彰のみ

### 令和2年度林産部門の選賞審査対象

★ 対象者：農林水産大臣受賞者  
(令和2年度農林水産祭参加行事)

★ 対象出品財数：58点（参加行事数 28行事）

#### 【出品財別内訳】

- ・経営（林業経営）9点（2行事）
- ・技術、ほ場（苗ほなど）8点（3行事）
- ・産物（木材、きのこ、木炭など）41点（23行事）

選賞審査の上で考慮する点として、どういうところに考慮したかですが、もちろん農林水産祭の参加行事においてすでに審査を受けていることですね。それで「産物」、「技術・ほ場」、「経営」、「女性の活躍」に求められている審査基準があって、そこでまずいい点を取って、いい評価を受けていることが大事なのです。その上で、さらに次に掲げる項目が評価されます。出品財の性質・内容が抜群で、広く社会の賞賛に値するもの、これが一つ目に重要なことですね。それから出品財の基礎をなす技術及び経営が特に優秀であること、出品財が農林水産業の近代化と産業的発展に役立つものであること、さらに出品財が地域社会に貢献すること、これらも大事です。そして、出品財について、人物、団体等が健全であること、しっかり経営がなされていることと、会社として、団体として組織がしっかりしていること、そういうことも評価の対象になります。

それで、第59回、令和2年度ですが、農林水産祭の林産部門の選賞の経過は以下のとおりになっております。まず選考委員ですが、委員としては3名です。それから専門委員が6名、配属専門委員が1名で、合計10名で審査を行ないました。選賞の過程としては、まず第1回の林産分科会を7月21日に開催して、事前に資料をいただいておりますので、書面審査をあらかじめやった上で、皆さんで集まって合議審査をして現地審査を行なう対象の候補財を3点選定いたしました。それで、現地調査を8月中旬から下旬に行なって、さらにその上で9月2日に第2回の林産分科会を開催して、現地調査の報告を受けた上で、さらに合議審査を行なって、3賞の候補財を決定いたしました。それを中央審査委員会の第2回の総会に上程いたしまして、ここで最終的に合議審査をしまして、3賞の受賞者を決定したという経緯でございます。それで、令和2年度の林産部門の3賞の受賞者は、天皇杯が今日これから業績報告をしていただきます有限会社上原樹苗さんで、代表は上原和直様でござ

### 選賞審査の上で考慮する点

農林水産祭参加表彰行事における「産物」「技術・ほ場」「経営」「女性の活躍」等に求められる審査基準に加えて次の点を考慮の上、選賞審査を慎重に行う。

- ① 出品財の性質・内容が抜群で、広く社会の賞賛に値するものであること。
- ② 出品財の基礎をなす技術及び経営が特に優秀であること。
- ③ 出品財が農林水産業の近代化と産業的発展に役立つものであること。
- ④ 出品財が地域社会に貢献するものであること。
- ⑤ 出品財について、人物、団体等が健全であること。

### 第59回農林水産祭林産部門の選賞経過

#### ★ 選賞経過

- ・令和2年7月21日 第1回林産分科会を開催  
(書面及び合議審査により現地調査対象3候補財を選定)
- ・令和2年8月中旬～下旬 現地調査
- ・令和2年9月2日 第2回林産分科会を開催  
(現地調査報告の上、合議審査により三賞候補財を決定)
- ・令和2年10月6日 中央審査委員会第2回総会を開催  
(合議審査により三賞受賞者を決定)

#### ★ 選考委員

- (委員) 鮫島正浩(主査)、坂本ちづる、田中浩
- (専門委員) 江口文陽、葛城奈海、小杉緑子、立花敏、  
藤掛一郎、山田茂樹
- (配属専門委員) 山本伸幸 以上10名

います。福島県相馬市で、これはプレスしたときのキャッチフレーズなのですが、「東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者」でございいます。これが今日のシンポジウムのタイトルになっているわけでございます。それから、内閣総理大臣賞が河合清様、河合くに様。大分県大分市、産物できのこでございます。さらに日本農林漁業振興会会長賞、これは磯村産業株式会社の倉淵事業所。代表が磯村欽三様。群馬県高崎市、林業経営でございます。

これから先は令和2年度の天皇杯を受賞された有限会社上原樹苗様の受賞理由について説明していきます。

これはプレスになった原稿をそのまま持ってきております。詳細については業績報告のほうでなされると思いますが、まず地域として南相馬市、ご存じのとおり、平成23年に東日本大震災の津波で大

変甚大な被害を受けた地域でございまして、当該地域の沿岸部の多くが消失するなど、大変な状況になったわけです。当然、その中に上原さんもおられて、大変な被害にあわれたわけです。それ以前も、明治からもともと桑の苗を生産していたのです。昭和に入り、戦後、造林が非常に盛んな時代に苗木の生産を開始したのですが、東日本の大震災でそれまでのものが津波で大被害を受けたので、まさにその被害から立ち直る、復興と、それから会社の再建をこの10年間やってこられたことが非常に大きなポイントです。その中で、コンテナ苗の生産とか、それから機械化、効率化、そういうことを非常に積極的に進められて、震災前の年間生産量150万本に対して200万本を超える、しかも樹種も多様で、他に類を見ない規模を誇る生産者になられた。これは大変大きなポイントかと思えます。

それで、受賞者の特色といたしましては、スギ、ヒノキ、クロマツといった針葉樹の造林用の苗木を生産しているのですが、それに加えて、森林の生態系の多様性に対応した苗木、特に非常にたくさんの種類の広葉樹の苗木を生産して、しかも、苗木業者というの

## 令和2年度林産部門の三賞受賞者

### ★ 天皇杯

有限会社上原樹苗（代表 上原 和直）  
（福島県南相馬市）技術・ほ場（苗ほ）  
東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者

### ★ 内閣総理大臣賞

河合 清・河合 くに  
（大分県大分市）産物（きのこ類）  
里山整備にも配慮した循環利用型のしいたけ生産

### ★ 日本農林漁業振興会会長賞

磯村産業株式会社倉淵事業所（代表 磯村欽三）  
（群馬県高崎市）経営（林業経営）  
流域の水源林を守りながら、優良大径材を生産する林業経営体

## 令和2年度天皇杯受賞者

### 有限会社上原樹苗（代表上原 和直）受賞理由 ①

#### ★ 地域の概要

南相馬市は、福島県の北東部に位置し、東北にありながら冬期間の降雪は殆どなく温暖で、夏は冷涼という寒暖差が少ない地域である。平成23年の東日本大震災で生じた津波により、当該地域沿岸部の多くが消失するなど、甚大な被害が発生した。

#### ★ 受賞者の取組の経過と経営の現況

有限会社上原樹苗は、明治初期に桑苗を生産したのが始まりで、昭和30年頃に造林用苗木の生産を開始した。東日本大震災で、社屋、苗畑及び各種機械の多くを津波で失う被害を受けながらも事業を継続し、コンテナ苗生産や作業の機械化等による効率化を進めた。その結果、被災前の年間生産量が150万本に対し、現在は200万本を超えており、本数・樹種数ともに他に類を見ない規模を誇る生産者となった。

は、どちらかというと、その立地地域が対象になっているケースが多いと思うのですが、上原さんの場合は、北海道から沖縄まで全国に市場といたしますか、ニーズを持って、それに対応されている、これが非常に大きなポイントになるかと思えます。

そしてもう一つ、非常に大きなポイントは女性の活躍でございます。ここに書いてあるように、正規雇用職員の7割を女性が占めているので、大変女性の活躍が目立つ。それから若い人の活躍が目立つ会社でございます。当然、働き手にやさしいというか、働きやすい環境づくりに非常に配慮されている。最近では育児休暇とか、介護休暇を取る規程などもしっかりして、従業員が長く働き続けるようないろいろな制度もつくっておられます。

それで、普及と今後の発展方向でございますが、まず独自に最適化した培土地の配合、それから作業機械や作業システムの改良、コンテナ苗や早生樹の育苗、栽培方法のデータベース化、マニュアル化等、さまざまな技術を保有していて、これだけでも非常に先進的な苗木の生産業者とお見受けしておりますが、さらに

造林や伐採を主とする事業も含めて、とにかく全国とネットワークを持って対応されていて、各地から視察もたくさん来られていると聞いております。それは今後の育苗技術の普及にもつながっていく。これも大変大きな評価のポイントだと思います。

最後になりますが、そのこととも関連するのですが、要するに森づくり活動。要するに苗木を提供するのにとどまらず、森づくり活動全体に対する情報発信、その連携に対して大変力を尽くされて、今後の苗木ビジネスの展開を牽引していく立場におられると思えます。

以上、私から選賞の過程と選賞理由の説明をさせていただきました。ご静聴ありがとうございます。（拍手）

令和2年度天皇杯受賞者  
有限会社上原樹苗（代表 上原 和直）受賞理由 ②

★ 受賞者の特色

(1) 幅広い需要に応えた苗木生産

スギ、ヒノキ、クロマツといった針葉樹の造林用苗木を主に生産しているが、森林生態系の多様性に対応した苗木の供給を目指し、緑化木等苗木も含め、針葉樹・広葉樹を合わせ常時100種類以上の樹種の苗木を生産する体制を築いており、販売先も北海道から沖縄まで全国に渡っている。

(2) 女性の活躍

重量物を扱う作業は可能な限り機械化を図っているほか、女性専用の休憩施設や従業員用のシャワー室を設置するなど、男女問わず働きやすい環境作りに配慮した結果、正規雇用職員の約7割を女性が占めている。  
また、育児介護休業等規程など、従業員が長く働き続けることができるよう各種制度も整備している。

令和2年度天皇杯受賞者  
有限会社上原樹苗（代表 上原 和直）受賞理由 ③

★ 普及性と今後の発展方向

独自に最適化した培土の配合、作業機械や作業システムの改良、コンテナ苗や早生樹の育苗、栽培方法のデータベース化やマニュアル化等、様々な技術を保有した同社は、苗木生産者にとどまらず、造林・伐採を主とする事業体も含めて全国各地から視察を受け入れ、育苗技術の普及に努めている。

苗木の供給だけでなく、地域の実情に応じた植栽樹種の提案等の森林づくり活動に関する情報発信など、苗木ビジネスの展開を牽引する立場として、今後更なる活躍が期待される。

○司会 鮫島先生、ありがとうございました。続きまして、業績発表でございます。天皇杯受賞の有限会社上原樹苗の代表取締役、上原様をお願いいたします。

## 【業績発表】令和2年度（第59回）農林水産祭林産部門

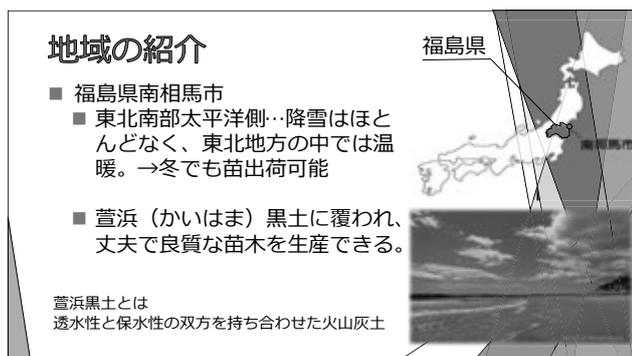
天皇杯受賞 有限会社上原樹苗 代表取締役 上原 和直

初めに、本日はお忙しい中、会場、並びにオンラインでのご参加をいただきまして本当にありがとうございます。

私は、福島県生まれの福島県育ちで、生粋の田舎者でございます。こんな東京のど真ん中で、こうやって皆さんの前でお話するのは大変慣れておりませんので、すごく緊張しております。つたない発表になりますが、皆さん、どうかよろしくをお願いいたします。

早速進めてまいりたいと思います。

スライドにもありますが、私も、福島県の南相馬市に位置していて、福島県は大変広いです。海側と中通りと会津地域とありまして、会津のほうは本当に2階が玄関になるほど多雪地帯の場所があったりも



します。私ども、苗の生産をやっている南相馬市は大変温暖で、東北なのですが、雪がほとんど降らなくて、苗木づくりの中でも冬の時期、雪が降って作業ができないことが少なく、環境のいい場所で生産させていただいています。下に「萱浜黒土」と載っているのですが、私ども、昔から遣わせていただいている農地なのです。昔、私は先代から「ざるの田んぼ」と聞かされたのですが、幾ら水を張っても水が抜けてしまうのですね。田んぼには向かない土地だったというか、それくらい水はけがすごくよい土地です。稲を作る上では向かなかったのですが、苗木の生産にはすごく向いている場所で、水はけがいいので、苗木の根っこの部分がすごく発達いたします。主根じゃなくて、側根という、細かい根っこの部分（細根）がすごく充実した苗ができるので、そういった場所でやっております。

地域の紹介ですが、南相馬市で一番有名なお祭りで「相馬野馬追い」といまして、大體歴史としては千年ぐらいの由来があると伺っております。国内でこのぐらいの馬が集まってお祭りをするのはほかに類を見ないと伺っています。皆さんも見に行っただ方がいらっ

しやるかどうかわかりませんが、お祭りの開催中は、本当に馬に乗って、甲冑をまとって、タイムスリップしたような風景が数日間見られるので、もし機会があればぜひ来ていただければと思います。ちなみに私の曾祖父まではこの馬追いに参加しておりました。私はまだ参加しておりません。

### 地域の紹介

- 相馬野馬追
  - 国の重要無形民俗文化財に指定
  - 約400騎の騎馬武者が甲冑をまとい、背に旗指物をつけて疾走する。



(画像引用元：相馬野馬追執行委員会HP)

次の紹介ですが、先ほどご紹介にもありましたように、私ども、南相馬市では東日本大震災で甚大な被害を受けました。当然、私どもの会社も大分海側に農場や出荷場など、社屋も、自宅もありまして、ほとんど津波によって喪失しました。極端な話になりますが、長靴一丁から始めたような形になります。現在、うちの会社は高台に移転して営業しております。

### 地域の紹介

- 東日本大震災の被害
  - 南相馬市では東日本大震災で震度6を観測。
  - 県内の海岸林の多くが津波により消失



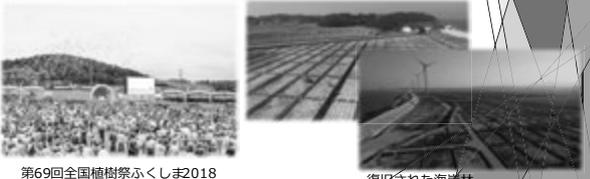
(被害前) (被害後)

画像引用元：福島県提供 画像引用元：福島民報HPより

復旧と復興なのですが、津波で流された海岸防災林の復旧事業も今はもうほぼ完了に近づいていまして、完了した場所で全国植樹祭が開催された形になります。南相馬市が会場で開催しました。当然、私どもの農場でも海岸防災林の復旧に使用するクロマツのコンテナ苗を生産しまして、現場に納品させていただきました。

### 地域の紹介

- 復旧・復興
  - 震災の被害をうけた海岸防災林の復旧はほぼ完了。
  - 平成30年には被災した海岸を会場に全国植樹祭が開催。



第69回全国植樹祭ふくしま2018 復旧された海岸林

こちらから会社の紹介になるのですが、当社は明治初期からやっています。先ほど先生からご紹介いただいたのですが、最初は桑苗の生産から始まりました。もともと桑苗の生産がとても盛んな地域でありまし

### 会社紹介

- 有限会社 上原樹苗
  - 創業 明治初期
  - 社員数 13人 (令和2年) 15人 (令和3年)
  - 苗畑面積 11.5ha
  - 会社沿革



明治30年 現在

明治初期 上原桑園として桑苗の生産開始  
 昭和30年頃 造林用苗木の生産開始  
 平成17年 有限会社上原樹苗として法人化  
 平成23年 東日本大震災による津波被害を受ける  
 平成24年 社業の再建と海岸防災林に使用するクロマツコンテナ苗の生産に取り組む

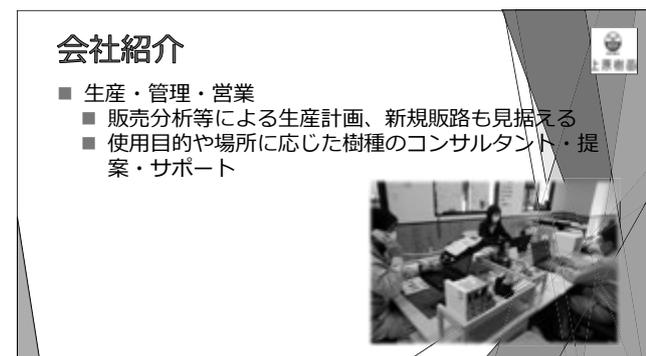
て、そこから始まって、桑苗の生産から造林用の苗木生産に変わってきて、現在に至るところです。このスライドに法被を着た人がいると思うのですが、この法被を着た人が私の曾祖父だと伺っています。そのときは機械がまだなくて、馬で苗を引いて起こしたというか、その当時は馬で引くのも皆さんほとんどしていなくて、手で抜いていたと聞いています。なぜ馬がいたかという、先ほど話したとおり、相馬野馬追いで馬が結構いたというか、家で飼っていたのです。それを利用して苗生産を行っていた、そんな経緯があります。

当社は様々な苗木をつくっているのですが、その中で広葉樹を含めて多種多様な苗を全国に販売させていただいているので、主なポイントが機械化だったり、ICTの活用だったり、女性の活躍だったり、福利厚生、育苗技術が



あるのですが、後に詳しくご説明しますが、ICTの活用に関しては苗木の生育のデータベ

ース化だったりとか、機械化に関しては苗木専用の機械がないもので、苗木の生産に活用できるものがあれば、率先して導入を図っています。女性の活躍ですが、もちろん男性もうちの会社のスタッフにいますが、結果として



で当社の仕事の内容が女性、男性変わりなく仕事ができるようなシステムで動いていますので、結果としては現在女性が大変活躍している、そんな形になります。福利厚生、これに関しましても、全員、正規雇用で、当然、一般的な企業と同じような仕組みで福利厚生を考えて、なるべくスタッフさんが心地よく仕事できる環境づくりを意識してやっております。育苗技術というのはICTの活用とリンクする部分もあるのですが、データベース化を畑の真ん中でも見られる仕組み作りをしたり、できることはアイデアを絞って、いかに皆さんが仕事を円滑に進められるかを常に考えて進めております。

事務所の写真ですが、実際はもちろん農場で生産したものを皆様のところに販売するのですが、販売の中で一番重要なのが使用目的や、場所、こういった場所に苗木を植えたいのかを事務所側でもクライアントさんからヒアリングをして、それに見合った樹種のサポ

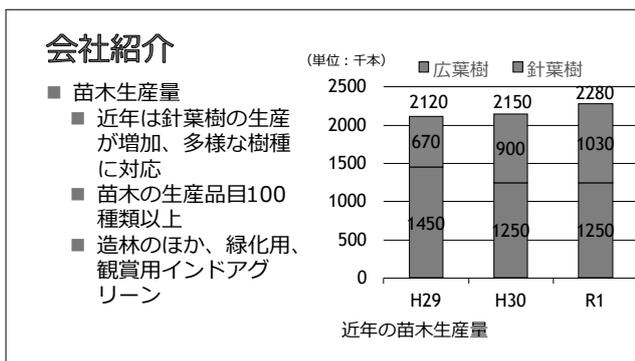
ートや提案などもしています。使用目的の例なのですが、たとえば石や砂を取った跡地を森林にしたいとか、スギ、ヒノキの林を将来的には広葉樹の森にしたいとか、さまざまな相談がございます。なので、事務所のスタッフ、苗木のこともそうですが、苗木以外の用途の部分もまだまだ勉強しなければいけない、その使い方まで考えて提案している、そんな形があります。

あと、使用の地域や場所も考えております。様々な種類の苗木を作るのですが、地域によってはDNAの固体が変わる場合もあります。なので、標高が高い場所なのか、それとも標高が低い場所なのか、暖かい地域なのか、寒い地域なのか、その樹種がある程度育つであろうものを提案して実際施工している方々に植えていただくのです。たとえば例だと、オオヤマザクラがあるのですが、本州も、北海道もあるのです。北海道のはエゾヤマザクラといって個体か多少違うのです。そういうことも、もちろん弊社では種子産地はどういうところから入手したのかを分かる範囲でデータベース化して、それになるべく沿った形で提案することを心がけています。

苗木の生産量ですが、近年、針葉樹の生産が増加しています。以前は畑で針葉樹の苗木を生産していたのですが、近年、針葉樹、スギ、ヒノキ、マツ類の生産を畑の露地の栽培からコンテナ内の栽培に切り換えて、昨年ぐら

いから針葉樹に関しては100%コンテナ内の生産に切り替わった状態でございます。施設で栽培する生産の形になりますので、設備を会社でも大分投資して、人件費というか、人の仕事の量を少なくして、効率が上がり実質苗木生産量が増えた、そんな形になります。

従業員さんですが、弊社は皆さん正社員で雇用しています。その中で女性の方が大分占めて、現場のほうでも女性が大分活躍している、そんな形です。なぜ女性がたくさん活躍できる状況なのかというと、もともと植物が好きだったり、花が好きだったり、結構植物に興味のある方が当社を希望してお仕事をなさる方が多くて、仕事の内容なども、女性だからこういう仕事ですよ、男性だからこういう仕事ですよとい



う仕事をなくして、男性でも、女性でも同じような仕事ができるような仕組みづくりを昔からやっております。結果的に現在女性が活躍して、弊社の苗木づくりのために尽力していただいております。

その中で福利厚生施設ですが、シャワー室をつくったり、休憩室なども男女別だったり、もちろんお手洗いなども男女別だったり、その辺、配慮できる部分に関しては最大限配慮して、皆さんが休憩時安心して休憩できる形で。記載はされておきませんが、社内ですべてフリーWi-Fiを整備して、休憩時に皆さんがフリーWi-Fiで自由に、いまはスマホの時代なので、そんなものも整備し、とにかくスタッフの人たちが快適に仕事をしていただける環境づくりをかなり考えております。

その続きですが、スタッフの負担軽減で、作業の多くを機械化しています。もちろん昔は重いものを大変な思いでやったときもあったのですが、苗木専用の機械というものは基本的にはないのですが、農業機械を苗木に転用できそうだなというものは率先的にシミュレーションしてみて、導入を図っています。

苗木ですが、震災以前にはもちろん海側にも苗木がございまして、津波で消失したような苗木もありました。震災後ですが、耕作放棄地をまとめたり、購入したり、そんなことをしまして、ちょっと見づらいなのですが、大体一まとまりというか、一団地というか、農場を集約することができ、作業効率が大変よくなった、そんな状況です。

### 会社紹介

- 女性の積極的な登用と能力評価 1
  - 役員、部門責任者等、責任ある役職への女性の登用
  - 経営方針の決定や組織運営への女性の参画



### 会社紹介

- 女性の積極的な登用と能力評価 2
  - 仕事の内容、成果等に応じた報酬・給与の支払
  - 女性が活躍できる場の創出



### 会社紹介

- 福利厚生施設
  - シャワー室や女性専用の休憩室を設置することで、働きやすい環境を整備



### 会社紹介

- スタッフの負担軽減
  - 作業の多くの工程を機械化し、スタッフの負担軽減を図る



広葉樹の苗畑ですが、様々な種類があるので、同じものを同じ場所で作ると成長を阻害して連作障害が起きるのではないかという問題があるのですが、当社は種まきや作付けに関しては、かなり考えて計画しております。例を挙げると、苗木ですが、成長が遅い植物と、成長がわりと早い植物、大きく分けると、二つの分類にして、大きいものは大きいもののプロット分けをして、小さいものは小さいもののプロット分けみたいな形で、大きいものに小さい苗木が圧迫されないよ

**会社紹介**

- 苗畑
  - 自社所有地の他、耕作放棄地を購入・借入



**会社紹介**

- 苗畑
  - 広葉樹の苗畑では連作障害が起きないように苗木品種を効率的に選択し、場所を変えて生産



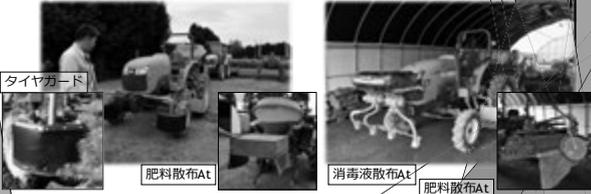
広葉樹                      針葉樹

うな、要はある程度環境よく育ててもらおうための苗畑というか、あとはこっちが南向きなのか、こっちは西向きなのか、日当たりの部分も結構考えて、せっかく作付けした苗が効率よく、種類、種類で育ててもらおう形で選択して生産しています。針葉樹に関しては、現在コンテナ生産ですので、施設栽培でスプリンクラーがある形で施設栽培をやっております。

先ほど機械の話をしたのですが、弊社はさまざまな機械を導入しています。その中でご紹介できるものだけ紹介させていただきます。たとえばタイヤガード

**生産施設について**

- 機械
  - 苗との接触を防止するタイヤガード等の開発
  - 海外技術の積極的な導入



タイヤガード                      肥料散布機                      消毒液散布機                      肥料散布機

つくってくれないか」と持って行って、工作してもらったやつです。何かというと、苗畑の管理作業でトラクターが農場内へ入っていくのですが、トラクターが苗木を踏むのです。そうすると、出荷時に踏んでしまった苗木は商品価値がなくなってしまうので、たとえば相当な面積をやるとなると、かなりのロスが出るので、いい方法がないかなと考えて、編み出したというか、簡単な作りなのですが、結構これが重要で、苗畑の管理作業でトラクターが苗畑に入っても苗木を踏まないのですよね。そうすると、つくった苗木が無駄なく出荷される形になっています。

これなども自作品ですが、肥料を散布するだけの機械で、効率よくその場所に散布できるようにカバーをつくってみた、そんなものになります。

これは既製品ですが、使える機械はどんどん導入してやっています。

これはちょっと見づらいですが、ドングリの種をまくだけの機械です。ここにドングリを入れて、コロコロとドングリのたねをまくだけの機械です。

この赤いもの、これなどは日本の機械ではなくて、デンマークの機械で、苗木



を作る上でいろんな種まきをするのですが、種によっては大きい種、小さい種といろいろな大きさがあるのですね。土をかけ過ぎてしまうと芽が出ないとか、あとは逆に、種が露出するようだと芽が出ないので、土かけはすごく重要で、何かいい機械がないかなと思ったら、日本にはなかったのですが、デンマークにあったので、砂をかけるだけの機械を、国内に代理店がなかったので、弊社で輸入しました。それだけの機械ですが、これを導入したことで、苗木の芽の出方が安定しまして改善された、すばらしい機械です。

あとは、コンテナ内の生産の中のスプリンクラーですが、水が出る部分とか、ジョイントの部分とか、細かい部品類はもともとイスラエル製の部品を使っています。なぜイスラエル製なのかと、イスラエルは施設園芸がすごく先進で、大分作りに強度もあって、性能もいいので、最初、この施設を作成するときに導入を図った。実際使ってみて、すばらしい部品類なので、大体10年ぐらいたつのですが、まだそんなに大きく壊れることなく、いまでも使わせていただいています。

あと、制御盤ですね。これはうちの会社の人員削減のためにすごい役割を持っているのですが、自動で冠水する制御を地元の電気屋さんをお願いして、オリジナルでタイマーを作成して、自動で何時何分に何分くらい水をかけますよという制御装置をオリジナルでつくっていただきました。それを今でももちろん利用してやっています。なので、人が水をかけることがなるべくないように。たとえば長期の休みなども、休みの日にだれか社員が来て水をかけることがない形で導入させてもらいました。

これも施設になると思うのですが、  
 当社は屋根のある施設というのをなるべく多く整備しまして、なぜかという  
 と、どうしても苗畑の作業だと天気  
 に左右されるのですね。雨が降って畑に  
 入れないとか、そういった意味で、ク  
 ライアントさんの希望に添えない場合

も以前はあったのですね。ところが、こういう室内というか、雨を遮る建物を大分整備した  
 ことによって、たとえば天気予報を見て、二、三日、長雨が降るなんてときには、苗木  
 を掘り起こして、中に苗木を持ってきて、選別して、先方さんの出荷に対応する。もらう  
 側の地域は雨が降っていない可能性もありますし、こっちは雨が降っていて農場に入れな  
 いといっても、先方さんの都合は別ですから、なるべく植えている人たちの希望に添える  
 ような形を図ってやっています。あとは、雨だからきょうは休みだとならないように、雇  
 用の部分に関しても安定した雇用ができる形で導入を図りました。

苗木生産の視点というか、考え方で  
 すが、多種樹の苗木を生産する上で考  
 えているところをいま大きく三つ書い  
 てあります。実際、三つばかりではな  
 くて、いろんな要件とか、要望とか、  
 相談がもちろんあるのですが、一番は

植える側の人たちが選択できる環境をわれわれ苗木屋さん提供しなければならないとい  
 うことがうちの会社の一番の考え方で、その中でどうしたら植える人たちの支援をす  
 ることができるかをやっている、そんなところになります。

また、これも会社の特色なので  
 が、苗木づくりです。種の入手と育苗  
 技術の複雑さで、種の入手ももちろ  
 んですし、育苗技術の複雑さも、種類  
 がたくさんあるので大変です。特に種  
 の入手ですが、近年、温暖化が影響して

いるのか、私も定かではないのですが、今まで種を採取というか、入手するのにそんなに

### 生産施設について

- 生産施設
  - 雨天でも作業が行える環境を整備し、作業効率の低下を抑制することで、生産性を向上



### 会社の特色

- 上原樹苗の苗生産の視点
  - 多種類の苗木を生産する。
    - ・ 森林保全や森林経営の観点から様々な樹種の苗木生産が求められる
    - ・ 森林をデザインできるように苗木樹種の選択を多くする
    - ・ 森林の経済価値の上昇や災害防止も踏まえた森林作りの支援

### 会社の特色

- 多種類の苗木を生産するために解決すべき課題
  - 種子の入手
    - ・ 着果に豊凶がある樹種は数年に一度しか種子採取できない
    - ブナ、ホオノキ等
  - 育苗技術の複雑さ
    - ・ 播種から育苗までの苗の管理方法は樹種によって異なる
    - 播種時期、病害虫管理、育苗管理等

苦労はかからなかった。数年、種がならないとか、そんな状況が結構最近多いです。なので、それに対応できるように考えてやっている形になります。育苗技術の複雑さですが、もちろん種類が多いので、播種時期がいろいろあります。たとえば夏まきとって、7月、8月にまく種があったり、秋まきとって、9月、10月にまく種があったり、あとは春まき、4月、5月にまく種があったり、種をまく時期に関しても種類によって大分違いがあって、それをももちろんデータベース化して、この樹種はこのときにまかないと、うまく芽が出ませんというのをマニュアル化して、そういうのを見ながらやっていただいています。病虫害管理、育苗管理、その辺の部分も同じくデータベース化して、なるべくマニュアル化して、詳しい管理方法は見ればわかるみたいに、そんな形で構築しています。今も構築中ですが、どうしても毎年、毎年、苗木づくりをやっていながら、10年苗木をつくっても10回しか種はまけないのですね。種まきは1年に1回なのです。そういう意味では時期など、管理方法は、1年のデータが当社にとってはものすごい宝でして、しっかりデータ取りをして、翌年の育苗生産につなげる、そんな形でやっております。

さっき言った種の部分で活動しているところですが、種子採取木の育成で、当社のは場内に15年ぐらい前に植えました。最初、植えた当初は当然ながらまだ若木なので種が結実しなかったのですが、やっと最近は生り年のと



きには種がすごく収穫できますので、大変助かっていて、大変種がなった年にはあるだけ採って、それを保存できるものなら保存してやっています。保存方法は冷蔵庫など、ちょっと見づらいますが、これはマイナス20度のストッカーです。もう少し増やそうかなと思

っているのですが、でなるべく短い時間で冷凍をかけるよう、そんなにむずかしい機械ではないのですが、マイナス20度の冷凍の機械です。種類によっては冷凍の技術で大体10年以上保存できる種類も、実際、試験的にやってみ



たらありました。そういった意味で、これからもう少し種子の保存方法なども勉強していかなければいけないと思いつながりやっております。

発芽の管理では、これは何だかわからないと思うのですが、この黒い幕が張ってある下にはサクラの種がまいてあるのです。サクラは種がなるのは6月なので、このヤマザクラに関しては夏まきで種を夏にまいてしまいます。



夏から翌春まで畑をしばらく占有してしまうのです。そうすると、風が吹いても、土が動かないように被覆している。これだけの話ですが、すごく重要で、放っておくと、もちろん風が吹いたりして、せっかくまいた種が露出してしまっただけで芽が出ないとか、そういった状況が出るので、すごく重要な仕事になります。これはクロマツですが、芽が出た、生えかかりの状態ですね。ここにかかっているのが寒冷紗、霜除け。あと、日光の調節です。これはマツ類ですが、上にポコンと実がついている状態ですが、鳥が食べるのです。それをよけるためもあって、以前一度やらなかったとき、やるタイミングが遅いときに、鳥が全部ツンツン食べてしまっただけで、一晩明けたらほとんどなくなっていたことも実際にありました。そんな形で発芽の際は皆さん大分気を使って作業に当たっています。

先程言った光の調節も、いろいろな種類があります。種類によっては日光を早めに好むもの。種類によっては日光を余り好まないもの、さまざまあります。そういう意味で植物の生育状態に合わせて光量の調節などをしながら、よりよい、的確な生育を目指してやっています。



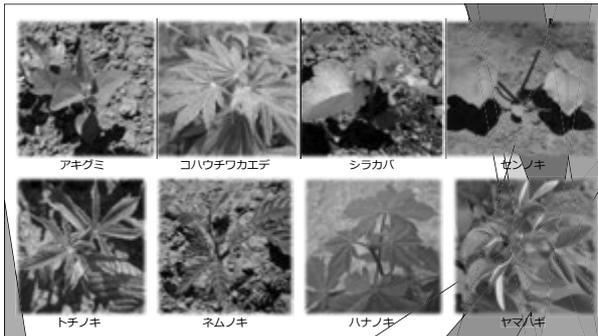
先程最初にICTの技術を導入していますとあったのですが、いろんな樹木の作り方や、どんな肥料を使ったか、どんな消毒の種類を使ったかを全部クラウドに保存しているのです。クラウドで保存することによって、もちろん事務所からのアクセスもできますし、現場、畑のど真ん中でスマホを見て、そう言えば、去年はこう



いうふうに行ったのだなというのを見られる仕組みでやっています。なので、わざわざ事務所に戻って、もう一回帳面を開いて、去年のこの時期、こんな作業をしたかな、どうかというのを見る必要がない、なるべく畑で作業をしながら情報をスタッフさんたちが共有できて、それをもとに仕事を進めることができるよう導入を図っています。



様々な種類があるのですが、ご紹介にあったように、年間大体100種類前後を生産しています。これはちょっと余談ですが、コロナ前ですが、以前は毎年林業先進国といわれているヨーロッパ、ドイツだった



り、スウェーデン、オーストリアとか、その地域の苗木生産者の苗畑を見学させてもらったり、あとは、林業の現場、どのような林業をやっているのかを勉強させてもらったり、コロナがなければ、本当に毎年行って勉強しなければと、以前はドイツの視察団の方々がうちの会社に来られて、規模



はもちろんヨーロッパのほうがすごく大きくやっておられるのですが、お互い、ある程度、情報共有できることがあるかと仲よくやっております。コロナがおさまったら、連絡を取って、また行きたいなと考えていまして、そんな状況でやっていました。

視察の受け入れですが、もちろん苗木の生産者も視察は全国からいろんな形で来ていただいているのですが、苗木生産者以外の森林事業者とか、苗木を使用する立場の方々だったり、あとは苗木の仕事を考える人たちですか、設計をする人たちが見に来られたりとか、こういうふうに苗木は作られているのだというのをうちの会



社はオープンにしています。隠すものはほとんどなくて、こんなふうに苗木をつくっているのですよというのをオープンにして、苗木の特性だったり、もしくは弱点だったり、計画する人たちとか、使用する人たちがよく理解して、苗木を使っていただければと考えてやっていました。

まとめになるのですが、天皇杯受賞に当たっては、関係各位の皆様や日々苗木生産に尽力している従業員の皆様の方でいただいた栄えある賞だと感じており、深く感謝申し上げます。

当社の今後の方向性ですが、苗木の生産に加えて、森づくりの活動に対する積極的な情報発信をしながら、先ほど少しお話をしたのですが、今後、国内の森林資源のあり方とか、利用の仕方とか、多様な考え方がもっと進んでくると思っているのです。その中で私

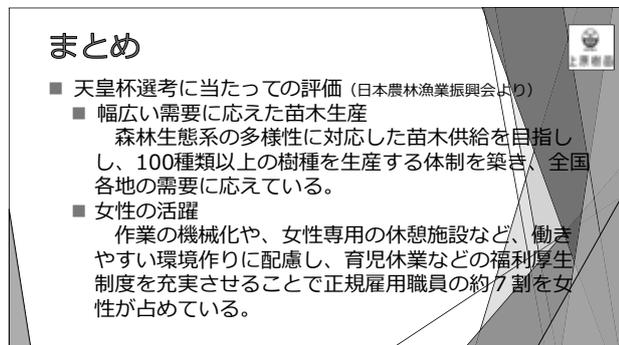
たち苗木屋さんが様々な苗木を準備して、その多様な考え方に対応できるような形を取って、皆様、使う側の人たち、もしくは使うのを考えている人たちの力になればと考えております。

ご静聴、ありがとうございました。(拍手)

○司会 上原様、ありがとうございました。これまでの報告に質問などもあるかと思いますが、後ほどパネルディスカッションの中で会場とのやりとりの場面もありますので、そちらでお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩を取ります。

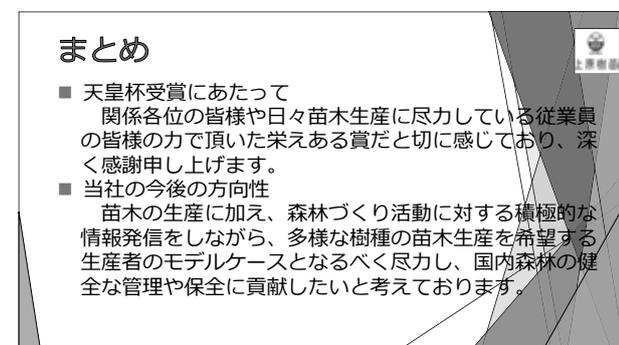
( 休 憩 )

○司会 それでは、再開いたします。これからはパネルディスカッションです。進行はコーディネーターとして鮫島先生をお願いをいたします。



天皇杯受賞に関するまとめのスクリーンショット。内容は以下の通りです。

- 天皇杯選考に当たったの評価 (日本農林漁業振興会より)
  - 幅広い需要に応えた苗木生産  
森林生態系の多様性に対応した苗木供給を目指し、100種類以上の樹種を生産する体制を築き、全国各地の需要に応えている。
  - 女性の活躍  
作業の機械化や、女性専用の休憩施設など、働きやすい環境作りに配慮し、育児休業などの福利厚生制度を充実させることで正規雇用職員の約7割を女性が占めている。



天皇杯受賞にあたってのまとめのスクリーンショット。内容は以下の通りです。

- 天皇杯受賞にあたって  
関係各位の皆様や日々苗木生産に尽力している従業員の皆様の方で頂いた栄えある賞だと切に感じており、深く感謝申し上げます。
- 当社の今後の方向性  
苗木の生産に加え、森づくり活動に対する積極的な情報発信をしながら、多様な樹種の苗木生産を希望する生産者のモデルケースとなるべく尽力し、国内森林の健全な管理や保全に貢献したいと考えております。

## 【パネルディスカッション】

コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会林産分科会主査 鮫島 正浩

それでは、これからパネルディスカッションということで、一応4時までということで80分ぐらいを想定していますが、始めさせていただきたいと思います。

いま上原さんから成果といいますか、事業の報告をいただいたわけですが、それをちょっとだけ振り返りたいと思うのですが、やはり最初にすごく印象に残ったのは、東日本大震災で大変な被害を受けられて、地域も復興しなければならないという中で、会社の再建と地域の復興を一緒に考えられて事業を再開させて、さらにそれを拡大展開させる、これは大変素晴らしいことだと思います。それから上原さんのお話の中にも何度も出できましたが、やはり苗木を育てることで、いろいろ多様なニーズに応える。要するに、いまよく言われておりますが、マーケティングですね。どういうところにどういうニーズがあって、どういうものが求められているのかという、多様なものへの対応が素晴らしいなと思います。これは大変な特徴だと思います。最終的には森林をデザインできる苗木をということだと思います。あとは技術の面では、ハードの面、タイヤガードなどをつけた機械ですとか、ソフトのほうはITCを利用したり、クラウド化して情報を共有化したりとか、情報をデータベース化して、それをさらに生かしていく、まさに今やらなければならない、どんどんそっちにいかなければいけないところに先進的に取り組んでいると、非常に先進性があるんですね。さらには多様な樹木の種子、それから育苗をしなければいけないので、いろんなことをしなければいけないのですが、それに非常にきめ細かく対応されてきた、こういう非常に大きな特徴があったかなと思います。

さらに女性が70%、7割が女性で、女性が大変活躍されているのです。これも大変大きな特徴ではないかと思います。それで、きょうは奥様の上原陽子さんがお見えになっておられるので、女性の目から見た苗木ビジネス、会社の様子とか、気を使わなければいけないところとか、ご苦労も当然あると思いますし、それからおもしろいこともあると思いますが、簡単で結構なのですが、一言コメントをいただけたらと思います。

○上原(妻) 上原樹苗の上原と申します。よろしくお願いたします。私に関しては会社で主に労務管理をさせていただいております。今回、女性の視点からとあるのですが、私

だけではなくて、社長の上原和直、やはり男性、女性問わず働きやすい会社を作るというところを一番にしております。それがやはり最終的に女性がとても活躍できている現場になっているのではないかなと思っています。

あとは、やはり労務管理に携わっている部分もありますので、特に女性、若い女性の方は、生活、メンタル的な部分、あとは体の部分、そういったところのご相談を受けて、仕事の進め方ですとか、お休みの取り方、そういったところの相談に乗って対応させていただいております。

社長も、私も、なるべく社員の方と気軽に話ができるような環境を作るようにしていて、そういったところもあって、たとえば女性スタッフから、休憩所ですとか、お手洗いですとか、いろんな要望を受けることもあります。そういったところを率先して反映していると思います。大変不慣れなもので失礼いたしました。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。女性の活躍というのが今回の評価の非常に大きなポイントなので一言いただきたいと思いました。どうもありがとうございました。

それで、私と一緒に現地調査をした坂本ちづる委員ですが、田中浩委員と私と3人で現地視察をしたのですが、みんな、やはり女性が多いのがすごく印象に残ったことで、環境が整えられていることです。働く場が非常にきれいな環境なのですね。それで、坂本ちづる委員のそのときのコメントを見ていくと、女性が働きやすい環境整備をまず挙げていて、就業規則、それから家族経営協定があるのですよね。それから、女性の積極的登用とか、まさに今おっしゃられたように女性の意見を取り入れた働きやすい職場。さらに私も同じ印象を持ったのですが、就業時間が非常にきっちりしていて、ちょうどお昼休みで戻ってこられるときに、社員の方が入って来られて、私たちに大変丁寧にご挨拶をいただきまして、ちょっとびっくりしたのですね。それから、こういうことも含めて、従業員の教育がよくできているなというのが坂本委員のコメントです。紹介させていただきました。

それでは、本日のこれからのパネルディスカッションの趣旨というか、話があちこちいくと、最後の取りまとめも大変だと思いますので、ポイントを挙げてみました。一つは、苗木ビジネスは大変重要で注目されて、これをきっちり動かして拡大していくのが林業にとって喫緊の課題なのですね。ですから、その辺を含めて、まずこの重要性ということで少し議論をしていきたいと思います。それから苗木ビジネス、苗木を育てるといふことの

技術的な課題と解決策。技術的な問題を話していく。それから、需要者との関係をどうやってつくっていくか。需要者との関係は非常に上手にというか、いい連携を取られて、いい形をとられている、その辺を一つ題材にしたいということです。最後はこれからの将来に向けた課題とか、展望、その辺を一緒に考えていく。そういう方向でいきたいと思えます。

ここまで、まず頭出しをさせていただいたわけですが、それぞれのご専門をお持ちのパネリストの方、4名に今日来ていただいていますので、その方をご紹介します。

まず上原さんの左隣に座られている方が田中浩さんです。田中さんは昭和62年に、当時は林業試験場と言って、いまの森林総合研究所の前身ですが、林業試験場に入られて、それ以後、森林総研で研究員、主任研究員、一時期は農林水産技術会議にも出ておられたようですが、領域チーム長、研究領域長、コーディネーター、そして理事ということで大変ご活躍していらっしゃいます。専門は造林学と森林生態学で、現在、皆様の資料にございますが、私と一緒に林産分科会の委員を担当されています。現在の所属は公益財団法人国際緑化推進センターで、技術顧問をされています。

それから、そのお隣は星比呂志様です。星比呂志様は福島県の出身ですが、林木育種センター、いま森林総研の中に入っていますね。平成4年からお勤めになられて、育種センターの育種部長を歴任されまして、その後、ご自身でファーム年樹という、いわゆる苗木の会社を作られまして、その代表に就任されて、それで現在は法人化をして、年樹株式会社を、今年、平成3年に設立されまして、現在、代表取締役で、まさに上原さんと同じで苗木を生産されている方でございます。

それから次は大槻晃太様です。現在、福島県林業研究センターの森林環境部長でございます。平成4年から福島県の林業試験所、現在の林業研究センターにお勤めになられていて、そこでの研究はシイタケの栽培技術、海岸防災林の保育技術、そして森林病虫害対策など、大変幅広くいろいろな研究活動をされています。特筆すべきところは、平成29年に福島県で全国植樹祭がございまして、その推進室の主任主査をされてございまして、植樹会場整備担当主任で、まさに苗木の調達等に携わってこられたのでございます。ということで、この辺は上原さんと一体的に動かれてきたのでございます。

そして、もう一人の方は小口真由美さんで、林野庁の国有林野部の業務課の課長補佐をされています。小口さんは平成4年に林野庁に入庁されて、平成5年から2年間、森林官をされてございまして、林野庁では研究指導課の課長補佐を経て現在の職についておら

れます。ということで、行政の立場で今日をご参加いただいております。

以上が本日のパネリストの4名の方々でございます。

まず、それぞれの立場で、今回の上原さんから業績について報告いただいたわけですが、それに基づいて一言ずつコメントをいただければと思います。

それでは、田中さんからまずお願いいたします。

○田中（コメンテーター） ご紹介いただきまして田中でございます。よろしく申し上げます。

まずは上原さん、本日はおめでとうございます。

私、審査委員会の委員ということで、昨年、上原樹苗の現地もを見せていただいて、もう1年たったのですが、今日上原さんのスライドのプレゼンテーションを見せていただき、改めて素晴らしいお仕事をされているなという思いを持ちました。

私は、先ほど紹介をいただいたように、もともと森林総合研究所で研究をしていて、専門は造林と森林生態学ということで、特に広葉樹の研究をずっとしてきて、最後のほうは、現在非常に課題になっている再生林に関連してコンテナ苗の生産に関わるようなプロジェクトにも関わっていました。そんな中で上原さんの名前も実は伺っていたのですが、コンテナ苗の生産は実は日本ではそれほど長い歴史があるものではなく、まだ開始してからわずか十数年です。今日のプレゼンテーションの中でも震災の後にクロマツのコンテナ苗生産から開始されたとお話をされていたのですが、まさにクロマツのコンテナ苗が10年前の震災後の海岸林の復興に非常に重要な役割を果たしました。コンテナ内のメリットは根鉢を持っており、過酷な水分環境でも比較的育てやすい、そういうメリットをすごく生かされて、それは大きな貢献だったと思います。

その後、このような形で活躍されているわけですが、現地視察をしたときに印象に残ったことが二つあります。まず、コンテナ苗生産に関しては先端的なところ、また規模についても大変大きな規模の生産をされていること。技術に関しては、今日のご紹介の中にもありましたが、先進国であるデンマークの機械であるとか、あるいはイスラエルにおける散水の装置、それをそのまま使うのではなく、いろいろな形で工夫されて活用して、またきょうICTという話もありましたが、散水に関しても適当なタイミングで行われるよう自動化しているので、非常に合理的な生産をされている。それを支えているのが、もちろん上原さんがすごく非常に若々しいし、進取の気性に富んだ方というのはあると思いますが、スタッフの皆さんのチームワークがいい、若々しいチームで作業をされている。それぞれ

のメンバーが非常に勉強熱心であるということ強く感じました。それが1点です。

2点目は、私の専門である広葉樹に関してですが、広葉樹の苗木生産がほとんどされていない中で、これほど多様な樹種を作られている。その際にも、今日のご発表にありましたが、広葉樹の多様性を生かすためには、主観の違いが大きい上に、地域の差が非常に大きいという問題があります。遺伝的特性の違いも問題になります。広葉樹の苗を生産する中でその問題を意識的に考えながら、課題もまだあるとおっしゃっていたようにまだまだ地域に使える苗を作るのは大変なことだとは思いますが、それを本当に意識的にされているところが非常に印象的でした。

私からのコメントは以上です。本当におめでとうございます。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。それでは、続いて星さんのほうからよろしくお願いします。

○星（コメンテーター） ご紹介いただきまして星でございます。上原さん、このたびは天皇杯受賞、おめでとうございます。ご紹介いただきましてように、私、森林総合研究所林木育種センターで長らく林業品種の開発に携わってまいりました。林業品種の開発といいますと、具体的には花粉の少ないスギですとか、マツノザイセンチュウに抵抗性のあるマツの品種ですとか、最近でしたら、話題になっていますエリートツリーとか、そういうものの開発に携わってまいりまして、25年ほどやってまいりましたが、いよいよ自分が60歳近くになって、今後、こういった形で社会に貢献できるだろうかを考えたときに、品種開発は、一定の年齢がくれば、そこであきらめざるを得ない問題もあるのですが、開発したものを実際に自分がプレイヤーになって普及していくのであれば、これは今からでも、がんばればできるかもしれないという思いもありまして、思い切って苗木生産の世界に飛び込みました。中身については、上原さんにもいろいろアドバイスをいただきながら現在も進めているところでございます。

そういうふうに、自分がこれまで品種開発であった研究開発を行ってきた立場から、実際に自分がそういったものの生産をするプレイヤーになって、あるいは研究者として歩んできた立場から会社を経営するような、会社経営と言っても上原さんのような立派な会社と違って、まだ歩きだしたばかりのヨチヨチした会社ですが、そういう経営者としての視点、そういったもので上原さんの仕事を拝見させていただきますと、上原さんとの出会いは、林木育種センターで、通常、県の方向けの会議を開くのですが、中には一般の苗木生産者も一緒に集まっていたりして、そういう中で上原さんに初めてお

会いしたのが始まりでございます。そういう中で、現在の上原さんの仕事を拝見させていただきますと、やはり広葉樹の苗木の育苗、先ほど受賞理由の説明の中にありましたが、何気なく写真の中でサラッと出ていましたが、広葉樹の育苗と言ってもなかなか多様でございます。種子の扱い方も一つ一つの樹種によって違いますし、乾燥させてはいけない種子ですとか、ある程度乾燥させて発芽を促進しなければいけない種子もございます。一つ一つ違います。そういうものを1樹種当たり数万本以上の規模で生産するのは、研究レベルで何百本を生産することは可能ですが、業として何万本もつくって、しかもそれをお客様が満足できるようなレベルまで高めなければいけない。これは簡単なことではなくて、私も苗木生産をしておりますので、非常にそれはよくわかって、先ほどの説明では軽くしか触れていなかったのですが、そういうものを長年続けていらっしゃるのにはまさに驚異的な実力の方であると拝見しております。

それから経営のほうも、非常に簡単なおっしゃっていましたが、十数名の方を常時通年雇用して、しかも福利厚生にも十分配慮して、皆さんが楽しく働けるような環境を作るのは、私、苗木を生産していて、苗木は非常に単価の安い商品でございます。1本100円とか、200円とか、そういうものを集めて、常時、十数名の方を雇用して、しかも働きやすい環境を整えるというのはなかなかむずかしいことであると、自分で経営を始めて強く思うところがあります。ですから、上原さんが現在されていることは、苗木生産を行なう者にとって一つの大きな到達点であると強く感じております。だからこそ、天皇杯という立派な栄誉ある賞に輝いたのかなと思うところです。また今後も上原さんのお仕事がしっかり発展して、上原さんにとって私は後輩に当たるわけですが、私どもにお手本を示していただくような道を担って、さらに私も勉強を続けていきたいと思う次第です。

○鮫島（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、次は大槻さん、よろしくお願いします。

○大槻（コメンテーター） 福島県林業研究センターの大槻と申します。このたびは、上原さん、天皇杯受賞、おめでとうございます。

うちのセンターにおいても、苗木ビジネスの一端を担っている業務がありまして、育種事業になりますが、その総括という位置づけで私がやらせてもらっているところがございます。ですので、一部を知っているところがありまして、やはり苗木の生産までに非常に時間がかかるというところで、実際、うちのセンターでも苦労しているところです。う

ちのセンターでやっているのは造林木の種類になりますので、上原さんの樹種数からすると、かなり少ない中ですが、それでもヒーヒー言いながら、ケツをたたかれながら、一生懸命、種を生産しなければいけない状況になっています。

そういう時間がかかるものをビジネス化するに当たってやはり必要なことが多分あるのだろうなと思って、私なりに考えたことをちょっと紹介させていただきます。

まずは先を読むところかなと思います。何かとこのご時世目先にとらわれがちですが、そういう視点ではなく、自分の役割、そういったものをしっかり自覚して長年取り組んでいるという会社の方針といいましょうか、そういったものをしっかり持たなければいけないのかなと思っております。

それと、やはり武器は多いほうがいいですので、今回の上原さんの手法でいきますと、樹種を増やす、そこに当てはまるのかなと思いますが、これについては今までのコメントーターの方もおっしゃっていましたが、やはり技術。技術と一言で言ってしまうのですが、これは並大抵な技術ではないと思っております。そういったものが必要になるのかなと思います。

最後、あとは共感を広げる。これは会社の方針もありますが、恐らく上原さんの人柄であるなり、活動であるなり、そういったところの共感を持っている方がたくさんいらっしゃるのだと思います。やはりそういう人の広がりがないと、もちろんスタッフさんはそうなのですが、それ以外にも種を取ってきてくれる方もいらっしゃいますし、そういう方の輪がやはり必要のかなと思っております。まさに先ほど上原さんから発表いただきましたスライドの中にはそれがたくさん含まれておりまして、やはり天皇杯がぴったりだなと思ったところがございます。

私、以前、海岸防災林の担当もしたことがありまして、そのときに上原社長さんよりも前にスタッフさんと接することがあったのですが、とにかくスタッフさんの現場の対応がすごいのでびっくりしました。当然、苗木を納入する際なのですが、「この苗木はいつ使いますか。では、こういうふうな管理をしてください」というのを丁寧に説明してまいります。その熱に私はびっくりいたしました。やはり自分たちがしっかり育ててきた苗をちゃんと使ってくださいということだけでなく、恐らく種を採った方、もしくはその木、そういったものに対する思いがあって、そういったものをすべてそういったところで伝えているのではと思った次第です。当然、それを受け取る土木業者の方々はわりとご年配の男性の方が多いのですが、そういった思いをちゃんと受け取っているのだと思います。福島

県海岸防災林のクロマツは伸び伸びと今成長しているところです。

あと、全国植樹祭推進室にもおりました。そこでは、特に皆さんに植樹していただく広葉樹の苗の調整などをしていたのですが、たまに飛び込みでこういう樹種が植えられないかなんていうこともありました。ただ、われわれが口をそろえて言うことは、上原さんのところがあるから大丈夫、どんな苗が来てもちゃんとあるよ」というのを支えに仕事をやっていたという当時の状況が今思い出されました。それだけ信頼を集めておられ上原さんだからこそ、このような賞をいただくのは県職員を代表して言いますと、うれしいなと思うとともに、当然かなと思うことがございました。今日は本当におめでとうございます。

○鮫島（コーディネーター） それでは、続けて小口さん、お願いします。

○小口（コメンテーター） ただいまご紹介にあずかりました林野庁業務課技術開発・普及班の小口と申します。よろしく願いいたします。本日は上原様、天皇杯受賞、本当におめでとうございます。今日のお話をいろいろ聞かせていただきまして、思ったところを述べさせていただきます。

まず、日本全体の森林は、今非常に充実しております、本格的な利用期を迎えております。そうしますと、その森林を切って使って、そして植える、そのサイクルをきちんと回していくことが持続的な森林を経営していくために非常に重要なことだと考えております。そうしたことを林野庁としましても、日本の森林・林業の施策の指針を示す基本的な計画を策定しています。この計画を、森林林業基本計画と申しますが、これは一番直近では今年の6月に新しく策定されておまして、この中でも充実期を迎えた森林を切った後の植栽も踏まえて、再造林を実施していくためには優良な種苗を安定的に供給しなければいけないことが非常に重要なものであると示しているところでございます。今日のお話を伺わせていただきましても、森林に植えることをユーザーの立場に立っているいろいろ心がけて苗木を作られていらっしゃるなということと、それから植える際にとっても重要なポイントとしまして、どこの業界でも同じですが、人が少なくなっている中で省力化ですとか、林業経営を成り立たせるためにコストを削減していくのが非常に重要でして、そういったことで成長のよいエリートツリーのような苗木ですとか、コンテナ苗の生産を林野庁としても進めているところなのですが、そうした新しい展開にも十分応えていただける、そういったところに取り組んでいただいていることも非常に心強いなと感じました。

あと、改めて、私の個人的な関係なのですが、先ほどご紹介いただきました森林官をや

っていたときに、ほんのわずかですが、国有林の苗畑にも携わらせていただいたことがございまして、そのときに現場で苗木を育てる苗畑の作業がどれくらい大変なことか、夏の間、炎天下の日差しを遮れないところで作業をすることの大変さが本当に身にしみてわかったのですが、そうした中で、上原さんの取組が、省力化、労働力をいかに軽減して、無理のない作業をしていくかにも非常に心がけていらっしゃることや、先ほど奥様からも若手の方が気軽に話せるような環境をつくって、要望になるべく応えていきたいですとか、女性の方が多いのだが、それは女性というよりも、男女問わずに、働きやすい職場を目指しているとおっしゃられていましたが、そういった会社の方針が今の会社の形、こうした栄誉のある賞を取られたということ、皆様の考え方が示されているのではと感じました。今日はいろいろと教えていただくことも多くて、種苗の関係だけではなくて、森林林業に携わる全てにおいて新しい技術を取り入れ、働きやすい職場をつくっていく立場で考えることは、どこにも通じるものではと感じさせていただきました。本日は本当におめでとうございます。

○鮫島（コーディネーター） ありがとうございます。大変熱のこもった賛辞のお言葉と、やはり共通したのは、苗木ビジネスはすごく苦勞が多くて、対応することが多くて、本当に大変だったでしょうという言葉が多かったと思います。

それで、これからパネルディスカッションに入るのですが、その前に只今のパネリストの方々の一言について、個々のことについてはパネルディスカッションの題材にもしたいと思いますので、お答えはそのときで結構なのですが、上原さんから何か一言コメントをいただければと思います。よろしくお願いします。

○上原（業績発表者） 皆様からのさまざまな評価をいただきまして大変恐縮であります。まだまだ、ますますやるべきことはやっていかなければいけないのかなと、いまお話をいただきまして、またいろいろアイデアを絞っていこうなんて考えた次第ではありません。広葉樹の生産に関していろいろご指摘をいただきまして、大変な仕組みづくりなのかなとご指摘をいただいているのですが、毎年毎年種類が増えていって、結果として今そのようになっているのです。案外、急にすぐいろんな種類をつくったわけではなくて、当然、階段を上るように種類を増やしていったのです。種類を増やしたら、それと同時にいろいろなニーズが生まれてくるのですね。僕はそのいろいろなニーズに対応できるように勉強しなければいけないのです。その積み重ねで、私も、スタッフの方たちも、毎年毎

年、勉強、手さぐりの状態を経験して今に至っている、そんな形になっています。

コンテナ苗の生産を現在盛んにやるような形になったのですが、やはり以前は裸苗があって、当社も裸苗をメインにやっていたのですが、コンテナ苗の利点を理解したときに、コンテナ苗をもっと普及して、それをうまく利用して事業者、ないしは植え側の人たちの役に立たないかなと、うちはいち早く裸苗の生産をやめて、コンテナ苗にグッとシフトした形になります。先ほどちょっと話も出たのですが、クロマツのコンテナ苗、海岸防災林の復旧の事業の中で大量なクロマツのコンテナ苗が必要とされたのですね。当然、昔からクロマツは相当量をつくっていたかという、つくっていなかったのですね。相当量必要だといったときに、一気にクロマツのコンテナ苗を作るような設備を導入して、復旧事業に間に合うように当社でも始業した、そんな形になります。

あと、女性の活躍で、家内からも話があったのですが、実際、女性はこういう仕事ですよ、男性はこういう仕事ですよと当社では分けていなくて、使える機械は当然導入して、男性、女性、余り変わりなく、能力を発揮できる環境づくりが一番なのかなと、私も大分昔からそういう考えがありまして、そういった意味で、結果として現在女性が活躍している。男性ももちろん活躍しているのですが、結果として当社は、苗畑で夏の暑い時期に作業、大変な作業をしているスタッフの方たちは女性が結構多いという形です。当然、大変な仕事がありますので、休憩時にはしっかり休憩を取ってもらいたいとか、有給の取得に関しても、有給を取っていない社員さんがいれば、有給を取得してくださいね、リフレッシュしてくださいねと、なるべく会社のスタッフの人たちの負担にならないように仕事をしてもらって、パフォーマンスを維持して苗木づくりに励んでもらいたいという思いがあってやっているところでございます。

以上です。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。それでは、これからディスカッションに入ります。先ほど趣旨説明でもありますが、課題として幾つか挙げたのですが、まず1番目として、苗木のビジネス、林業上、社会上で大変重要な位置づけだと。特に今非常にしっかり展開していくのが喫緊の課題であるのは皆さんご承知のとおりかと思えます。そのこともあるのですが、まず、やはり上原さんのことを語るには東日本大震災が大変重要なポイントではないかと思うのです。この震災でまさに海岸の防災林がやられてしまって、これを再生するのが社会的にも大変重要な課題だったわけですね。それを全面的に支えていったのではと思うのですが、簡単に言ってしまうと、そもそもなんです

が、ご自身が被災者で、とにかく施設も相当被害にあわれて、会社の再建をしなければいけないという中で、海岸防災林、しかも、いまお話がありましたが、クロマツのコンテナ苗にチャレンジされた。これは大変なことではと思うのです。当時、コンテナ苗はまだ出始めた段階であるし、相当勇気の要ったことと思うし、やはりそれを支える技術もないといけないわけなのですが、そういうことにどういうふうに対応していったのですかというのがお聞きしたいことですね。あと、震災の前と震災の後で、ご自身、それから会社のあり方、経営等で大きく変わったこと、ちょっとその辺から始めさせていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

○上原（業績発表者）　クロマツのコンテナ苗、先ほど話が出ましたが、東日本大震災で大量のクロマツを一気に使用する必要があるので、当然、県の担当の方と綿密に打ち合わせをしながら、何年かの計画で、単年度にどれぐらいの量を植えたいのかと、ある程度の打ち合わせのもとで、じゃ、年間このぐらい使用したいといったときに、当然、私どもの会社だけで福島県内の苗木の需要を全部賄うことはできなかったのです。当社でクロマツのコンテナ苗を生産する上で、福島県内のほかの苗木の生産者の方たちも当然協力していただいて、コンテナ苗を生産してみませんかと話をしたわけなのです。ただ、問題は、当社もそうなのですが、クロマツのコンテナ苗、針葉樹のコンテナ苗をつくったことがなかったもので、どうやったらつくれるかなというところで、最初に着手したのが用土の開発でした。用土を開発して、福島県内の生産者に用土を使っただいて、もちろん容器がありますので、当社でブレンドした培地を使用して、わりとすぐクロマツのコンテナ苗の生産は着手できるような形でやってみた次第です。そういうこともあって、県内、当社も含めて、ある程度の量を担保して海岸防災林に納品することができたということです。

○鮫島（コーディネーター）　クロマツのコンテナ苗というのは、震災前はそういうのはあったのでしょうか。震災が終わってから、みんなで急遽対応を始めたのですか。

○上原（業績発表者）　震災以前は、クロマツの苗木自体はつくっていました。ただ、膨大な量を使用するわけではなかったもので、膨大な量をもともと以前から生産していたわけではなく、もちろんコンテナ苗の生産もなくて、以前、クロマツは裸苗の生産で、畑で生産していたので、全く別分野というか、未知の分野ではあったものの、施設園芸の技術がある程度構築していたので、そういう施設園芸の仕方、もちろんそれは園芸の分野なのでしょうが、そちらの技術をなるべく転用したり、もちろん勉強したりして、植物をコンテナ苗で作るような仕組み

を、もちろん手さぐりの状態からですが、やってみた、そんな形になります。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。いつも上原さんとお話をすると、こうやりました、これをやりましたと、非常に取り入れるための戦いというか、大変なご苦労があったと思うのです。一緒に活動されてきた大槻さん、あと、星さん、何かこれについてコメントをいただければと思います。

○星（コメンテーター） 上原さんは、本当に簡単におっしゃるのですね。コンテナ苗の育成技術が日本で本格的に始まったのが平成21年からなのですね。震災が起きたのが平成23年の3月ですので、日本の先進地域でもまだ2年しか経験のない時期で、本当に軽くおっしゃるのでびっくりしちゃったのですが、そのときに「やりました」というのは本当に勇気もありますし、それをやっていく技術。用土も開発したと、これも簡単におっしゃいましたが、まだ用土も手さぐり段階で、各社が開発している段階でしたので、三つぐらいのことを同時に、あの時間のない中で。私が林木育種センターにいたときに、とにかく県に対して早く採種園で抵抗性マツの種が採取できるように、どんどん原種の苗木を出せ、出さなければいけないので、我々も頑張ってたんですけど、一番大変なのは実際の生産現場で、これまでやったことのない新しい技術を取り入れて、しかも、それを安定的な生産のレベルまで一気に持っていかなければいけない。5年ぐらいかかることを数カ月で決断してチャレンジしなければいけない状況に置かれてやっていたのを私どもは知っていますので、今言われたことは本当に通常では考えられないような驚異的なことではなかったかなと、話を伺っていて感じておりました。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。私もそのように思います。大槻さん、いかがですか。

○大槻（コメンテーター） そうですね。当時、私は、どちらかというと、現場で苗木ができるのを待っているという気楽なほうの感じに思えて仕方がないのですが、ただ、各県内の業者さんから納入された苗木は基本的にすばらしいものがたくさんありました。先ほどお話ししたとおり、活着率はすごくよかったです。それだけの技術をその短期間にできたというのは、やはり上原さんの指導、もしくは全体のまとまりというのですか、そういったものに大分助けられたのかなというのは非常にしみじみと思うところです。ただ、その中でもやはり上原さんの苗木がいいとおっしゃる業者さんは多かったですので、その技術、思い、そういったものはやはり人一倍大きかったのかなと、非常にありがたく聞いておりました。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。まだいろいろ話したいことはいっぱいあるのですが、実は私も福島の植樹祭に参加させていただいて、まさに海岸防災林の植樹の現場で植えさせていただきました。それは上原さんのところに行くより前の話です。ですので、何か上原さんのところに行って大変しみじみした思いになりました。ここから来た苗木なのだと思うと、大変感慨深く思った記憶を持っております。

それで、コンテナ苗の話が出てきたのですが、コンテナ苗はいまどんどん伸びていると思うのです。ちょっと技術的な話にもなるのですが、林業とか、社会上での重要性ということで、森林林業白書にも出ていたのですが、いま主伐がいよいよ盛んになって行なわれてきているわけですが、主伐面積に対して再造林率が3割ぐらいですか、低いですよ。今の状態だと、25年から60年後には35年生以上で主伐できるような人工林がなくなる、そんなコメントが書いてあって、数で見るとそういうことなのだろうと思うのです。そうならないために、とにかく再造林するためには苗木がなければいけないわけなので、これから苗木の数をどんどん増やしていかなければいけないので、これはいま苗木のビジネスの中で非常に重要な課題ということなのです。もちろん上原さんはこれまで増産をされてきているのですが、多分、2倍とか、3倍とか、非常に大きく拡大しなければいけないと思うのですが、その辺に対して何か戦略をお持ちだったらお聞きしたいのです。もちろん数だけではなくて、何を植えるかというのも当然あるのですが。

○上原（業績発表者） まず、コンテナの針葉樹、コンテナ苗の生産ですが、現在、機械の導入が結構進んでいまして、苗木の植えつけとか、これは苗木生産の部分ですが、種の選別など、当社ばかりではなくて、さまざまな研究をなさっている方たちの努力の賜物だと思うのですが、よりコンテナ苗の生産そのものが作りやすくなったと私は感じております。これは資金力の問題ももちろんあるのですが、しっかり施設栽培、施設を導入すれば、当然ながらいまの2倍、3倍、4倍、5倍、10倍、簡単に作れると私は感じております。個人的な考えですが。仕組みは種をまいて、そこから山に納品するまでの一連の流れの仕組みが構築しているので、あとは植える側の問題が結構あって、苗木は案外作れるものだと私は思っていて、出荷の問題があるのです。日本国内の今の出荷の仕組みそのものというのは、植える分だけ持ってきてくれというのが結構実情であるので、たとえば農場で生産をして大量に出荷しなければいけないとなった場合には、いまの出荷の形態、体系、もしくは植える側、受け入れ側の形そのものも変わっていかねば、ちょっとむずかしいのかなと。作るのは簡単かなと私は思っています。

○鮫島（コーディネーター） 何か木材と同じで、木材の流通というのはすごく大事で、苗木を受け入れる現場と苗木を作っている側の繋がりというか、その辺、すごく大事だなと思うのです。上原さんがいれば、その辺もつながってくるかなという気もするのですが、田中さん、何かこのテーマについてご意見がございますか。

○田中（コメンテーター） いま上原さんがおっしゃったところがすごく大事なのだろうと思います。上原さんの技術というか、スタンスというか、「幾らでも作れるよ」とすごく簡単におっしゃいました。自分の制御可能な範囲内ではできることは、技術的には多分自信がおりなのだと思うのです。苗の性質としてはどういうものが求められて、先ほどの現場の状況がとか、地域での苗の流通もそうですが、それがシステムとして明確になれば、それは作れるよという、技術上の自信はきっとおありになるのだと思うのです。結局、苗木生産の場合には、最終的にどんな苗が本当に必要とされて、現場ではどんな形の、たとえばさつき培土の話が出ましたが、培土によっては抜きにくくなるから、それでは土地の作業効率が悪くなるとか、あるいは逆に根鉢が壊れやすくなってしまったりとか、最適な培土の種類や性質というのは一つではないのではと思うのですよね。それがまた、多分生産される量であるとか、現場の使い方によっても左右されるので、その辺がきちんとつながれば、いまおっしゃったように苗木生産者としての上原さんは対応できるのだろうなと思って話を聞いていました。逆に、今日のお話にもありましたように、森づくりにまで関わりたいとおっしゃっていましたが、苗木作りサイドのほうから今のようないろんな制限条件だとか、このぐらい可能だという発信をどんどんしていただくことで、苗木生産者と林業現場が有機的につながり、より合理的な生産システムの構築、あるいは生産性向上への意欲をもっともっと上げていく形ができるのかなと思って話を聞きました。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。上原さん何かコメントがございますか。

○上原（業績発表者） まさにおっしゃるとおりで、本当に苗木屋さんだけがやってできる部分でもないのは私も感じておいて、苗木を使う側も、一体となって、二人三脚で進めていかなければ、今後、再造林、もっと拡大しなければいけないときに対応できないのかなと、私も結構真剣に考えるところではあります。どこからクリアにしていかなければいけないのかなという課題ももちろんたくさんあるとは思いますが、できるところから行なっていければなと思っております。

○鮫島（コーディネーター） 今のお話を聞いていて、私は木材を使う側の人間で、川

上、川中、川下をしっかりとつなげていくことがとにかく大事だ、そういう認識でやっているのですが、実は山を育てる方も、苗木を作る方からずっと最終的に山を作っていく、そこまでが一体化されていないといけないのではという認識を持ちました。

小口さんにお伺いしたいのですが、行政という立場で、私、先ほどちょっと言いましたが、これから主伐をきちっとやっていかなければいけないが、絶対、再生林がタイアップしていないと非常にまずいわけで、その中で苗木というのはそのスタートなのですよね。苗木がなかったら、再生林ができないわけで、その辺、林野庁として、使う方ではいろいろなロードマップを作り、制度を作っているが、今度は苗木を実際どういう形で作って、どういうふうに拡大していったら、どうやって山を再生林していくか、その辺のロードマップみたいなものはないのでしょうか。そういうものが絶対必要な気がするのですが。

○小口（コメンテーター） 苗木自体の技術開発、育てるための時間短縮ですとか、労働力の軽減のための技術開発につきましても、林野庁で支援をしながら事業を進めております。あと、植える側の造林、生産はかなり機械化が進んでおりまして、労働力の軽減も徐々にできておりますし、生産性も拡大しているところなのですが、造林技術は最後に取り残されておりました、植えることもそうですし、下刈り作業ですとか、そういったところが全部人力になっておりますので、そこでどうしても手間隙がかかったり、重労働であったりという問題もありますので、そちらについても技術開発を行なうことによって、全体で林業のトータルコストを減らしたりですとか、省力化を進めることも、技術開発の方向性として進めているところでございます。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。トータルコストという話が出てきたのですが、苗木はそんなに高いものではなくて、決して儲かるわけではないと思うのです。苗木を作るコスト削減みたいなものの取り組みは結構やられているのでしょうか。

○上原（業績発表者） 苗木の原価なのですが、当然、種が苗木づくりの中で一番のスタートですが、容易に種が集まるものはいいのですが、何年かに一遍しかならない種があったり、もちろん種類によっては成長が結構早く、容易に成長するものがあったり、逆に成長が著しく遅いとか、そういったもので、うちは原価計算を個別で種類ごとにやっているのです。そこで、どこからコストカットをすればいいのかというと、やはり仕事の進め方とか、機動力とか、そういった人件費の部分が結構多くて、ある程度機械力でできる部分はもちろん機械力でやっているのですが、いかんせん、苗木生産、人力、人の力を借りて

やる場合もかなり現状であります。すべてオートメーションで、ロボットでというわけでは今の段階ではまだないので、人間の力でやっているのです、なるべく無駄な仕事を省いて、効率よく仕事ができるような仕組みづくりがうちの会社の一番のコストカットなのかなど、結果としてですが、そんなことでやっています。そのためのデータベース化で、例えば昨年の肥料はこれ位やって、しっかりした生育が見込めましたと、これだと、無駄に肥料をやる必要がないのですよね。そういうことの積み重ねでやっているように思います。

○鮫島（コーディネーター） 今ロボットの話が出てきたのですが、ロボット化というのは結構できる可能性があるのですか。なかなか難しいですか。

○上原（業績発表者） 技術的には可能なのかなと思っています。実際に先進ヨーロッパの苗木のファーマーさんの中で、完全にオートメーション化された苗木生産の工場を見てきて、衝撃を受けたのですが、社員さんが10名程度で6,000万本を生産していたのですね。6,000万本というと、日本国内の造林の本数に匹敵するのですよ。それが衝撃的過ぎて。確かに技術的には実際にやっている国もあるのでできるかなと思います。

○鮫島（コーディネーター） そういうところはなかなか期待感がありますね。どうもありがとうございました。

時間がすごく押してしまっていて申し訳ないのですが、技術的な課題と解決策というのはいろいろあると思うのですが、いま林野庁で苗木をとにかくどんどん増やしていかなければいけないのですが、何か技術開発の補助とか、そういうのはどんなことをされているのですか。

○小口（コメンテーター） 先ほどもちょっとお話しさせていただきましたとおり、再造林を増やしていくためには、林業として、経営として回していけるような方向性というのをある程度検討していかないと、植えたいという人、切っても、植えて森を育てたいという人が増えていきませんので、そこを踏まえて、成長の早いエリートツリーのような苗木ですとか、コンテナ苗の春植えだけではなく、秋などでも植えられるので、労働力の平準化、あとは適地にいろいろなものを植えられるという利点もございますので、そういったことも含めて、省力化だけではなくて、低コスト化になるような苗木を作っていくことを国全体で進めております。コンテナ苗施設の整備や、新しい品種を植えていただくための原種の苗木を都道府県それぞれの地域で植えていただくためのほ場整備、そういったものへ支援は国の施策として実施しております。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。今エリートツリーというのは上原さんでも導入されているのですか。

○上原（業績発表者） エリートツリーというか、特定母樹で、それは昨年ぐらいから結構本格的に種が福島県内で生産されるようになったので、現在、スギの特定母樹に関しては結構進んでいる状態になっています。私も生産現場を見ているのですが、普通のスギと比べるとすばらしい成長です。あれを山に植えたら、確かに立派な山になるなと思います。

○鮫島（コーディネーター） 苗木ビジネスそのものも、エリートツリー、特定母樹、そういうものが入ってくると、相当やり方も変わるところがいっぱいあるのですか。

○上原（業績発表者） そうですね。山で植えている人たちは、当然、すぐ下刈りを抜けますので、もちろんコストカットにもなりますでしょうし、苗木の成長がすばらしいというのは、後々収穫するに当たっても早く収穫できるという意味ではすばらしい品種なのかなと思います。針葉樹ですが、基本的に当社はもちろん林業種苗法の中でやっているもので、福島県内に主に出荷をしていましたので、福島県内に特定母樹が導入されたので、福島県内の造林が大分進んでいけばなと思っております。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。時間が大変押していて、今日は会場にも大勢集まっていたいただいているので、一旦、会場からご質問とか、ご意見を何かいただければ。どうぞ。

○質問 東京都森林課のオケガワと申します。東京都の苗木の需要は上原さんのところかなり賄っていただいているのでお礼を申し上げます。ありがとうございます。

東京都もコンテナ苗をようやく作り始めたところですが、私としては裸苗の安定感といえますか、裸苗もなかなか捨てがたいなと思っているのですが、上原さんのところでは全部コンテナ苗に切り換えてしまったのは、やはり生産性とか、費用対効果とか、そういったところからなるのでしょうか。

○上原（業績発表者） 費用対効果とか、生産性とか、そういった部分もちろんあるとは思いますが、最大の利点というか、コンテナ苗というのは裸苗と比べて使用頻度がすごく需要が効くというのですか、耕培地が一緒なので、裸苗というのと、扱う期間がすごく狭まっていたのですね。それで、結構時期を遅れたときに植えてしまって枯れてしまったと。それを引き抜いてもう一回植えるという話を私も昔に結構伺って、コンテナ苗がこうやって普及したときに、せっかく汗を流して山で苗木を植えている人たちが枯れないよう

になるのだなとイメージしたのですね。そういう意味で、もちろん裸苗も素晴らしいと思うのですが、一気にコンテナ苗に変えたのは、植える側の人たちのことを考えてコンテナ苗に変えた、そんな経緯があります。

○質問 ありがとうございます。私は裸苗が安過ぎるのではないかなと個人的に思っていて、そこがもう少し引き上がるのであれば、今コンテナ苗の生産が3割位にはなっていると思うのですが、依然として半分以上は裸苗の生産で全国を賄っていると思うので、基本的には低コストが叫ばれる中で、苗木の値段を上げるのはどうなのだとなってしまうかと思うのですが、私が林野庁さんの事業評価プログラムで森林関係保全整備事業を評価すると、結構、費用対効果が4とか、5が出る事が多くて、もうちょっと費用がかかっても、これだけ効果のあることをやっているのであればいいじゃないかと思ってしまうのですが、だめですか。

○鮫島（コーディネーター） 課題はあると思いますが、多分、全体にかかるコストというのは全体のシステムをどう作るかということとも関わっているんで、そういう全体を上手に納める手があるのかなと。

○上原（業績発表者） 先ほどお話ししたのは、スギのコンテナ苗と裸苗のお話だと思うのですが、当社は広葉樹の生産は、ほぼ100%裸苗で生産して皆様に使用していただいているのです。当然、裸苗とコンテナ苗のコストは、裸苗のほうが大変なのじゃないかと。実際に作業をしているスタッフの方たちを見ていると、当然、施設で栽培した植物と、裸で、畑で生産した植物というのは、裸苗で生産したほうが労力はかかっているんで、裸苗の値段をもうちょっと上げたほうがいいのではないかというのは大変心強いお話なのですが、私も個人的には、大変な作業でやっているものなので、もう少し評価を上げてもらってもいいのかなと思います。ただ、需要の問題とか、あとはロスの問題とかもあるので、一存ではわかりかねるところもあるのですが、当然、肥料代とか、そういうコストが現在下がっている状況ではなくて上がっている状況だと思いますので、われわれ生産者としてはぜひ見てもらいたいなというところはあります。

○田中（コメンテーター） 今のご質問について。ちょっとモヤモヤとしたので、ご質問の趣旨を確認させてください。最初のもうちょっと裸苗の価値を見直して作っていただけたら、というご意見は、先ほど言われたように、二つを比べたときに、これだけ低価格で裸苗があるのだったら、裸苗をもっと使う場所があるでしょうという意味でご質問になったのですか。

○質問 裸苗の値段がもう少し上がれば、生産をやめていかない人も出てくるのかなと思ったのです。

○田中（コメンテーター） そういうことですか。わかりました。裸苗とコンテナ苗を比べたときに、裸苗のいいところもちろんあり、伝統的な技術として十分良いものが作られているのだが、裸苗の特徴として、丁寧に植えるという植栽技術と合わさったときに裸苗はすごくいいパフォーマンスをするということが、コンテナ苗の研究をしている初期にわかったことでした。これから、植栽に際して、中々そういうことが期待できない状況下では、少々価格が高くても、コンテナ苗の性能というのはとてもいいのかなということですね。両者のメリットを考えてのバランスが大事になってくると思うのですが、それでちょっとお聞きしました。おっしゃった意図がそういうことでしたら、分かりました。ありがとうございます。

○鮫島（コーディネーター） ほかに何かご質問がおありだったら挙手をお願いします。よろしいでしょうか。では、時間が大分押しているのですが、ぜひ聞いておきたいなと思ったことがあって、やはり上原さんは事業者さんとの関係の作り方にすごく特徴があって、どこにどういうニーズがあって、何を供給するのか、いわゆる需給の量と質、そのバランスを上手に取っておられると思うのです。それは簡単に言ってしまうとそれまでなのですが、実は作るのがすごく大変なことだったのではと思うし、さっき大槻さんの話にもありましたが、共感して一緒にやっているという意識を作らないと、そんなことができるわけがないと思うのです。その辺を作っていくということで、苦勞されたこととか、こういうことをやるといいのですよという何かご提案があったら、お聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

○上原（業績発表者） おっしゃるとおりで、今となつては簡単にやれている部分なのですが、最初はやはり試行錯誤だった部分もちろんあります。現在、うちのクライアントさんは全国多岐にわたって、当てにされてというか、いろいろな形でお世話になっているのですが、当然、最初からプロフェッショナル集団だったわけではなかったのですね。苗木の種類と同時に、要件とか、要望とかを勉強していった、そんな形です。困ったときは上原樹苗に行けば何とかなるぐらいのところ、結構業界の中にあつてなるべく対応できるものは対応してきた結果として、マーケットから追い出されることなくやれてきたのかなと考えます。

○鮫島（コーディネーター） 一言で言うとそうなのですが、どうやってそれができ上が

っていったのでしょうか。それがすごく大事なところだと感じるのです。

○上原（業績発表者） どうやったかという、本当に純粹に足で稼いだのが本当のところです。

○鮫島（コーディネーター） 全国を回ったのですか。

○上原（業績発表者） そうです。やはり地域、地域でいろんな実情を抱えているのですね。もちろん全県を回ったわけではないのですが、その地域、地域の実情というのはやはり肌で感じないとわからない部分もあったので。先週も宮崎と熊本に行ってきたのですが、時間のある限りは地域の実情だったり、地域のニーズだったり、困っていること、それを肌で感じないと、マーケティングというか、どれだけ苗木を必要とされているのかわからない部分があります。コロナ禍で大分移動の制限がかかっていたので、ここ2年ぐらいは自粛しているところですが、それ以前は本当に時間のある限り足で稼いで、いろんな人とお会いしていろんな話を聞いて、毎年毎年勉強しながらやって、今に至っています。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。実はもう4時なのでね。それで、会場の方でやはりこの機会に何か上原さんにお聞きしたいということがあったら挙手いただきたいのです。大分、いろいろな話をしたので、いろいろな情報はつかんでいただけたと思うのです。

そうしましたら、いつまでも延長するわけにはいかないのですが、まだディスカッションしたいことはたくさんあるのですが、ディスカッションの4番目に苗木ビジネスの将来について。これから事業を拡大していくことは絶対大事で、その鍵は一体何なのか。そのために人を確保しなければいけないですし、いろいろあると思うのですね。そのことを含めて、今日のパネリストの方々にこれからの苗木ビジネスということで、今までの話で特に印象に残ったことを含めてコメントを1人2分程度でいただきたいと思います。先ほどと同じように田中さんから。最後に上原さんから全部含めてもう一度お話しいただきたいと思います。

○田中（コメンテーター） ビジネスの話になると、私から偉そうにコメントすることは何も無いのですが、最初に申し上げたように、私も広葉樹の生態の研究をしてきて、思いとしては日本のさまざまな広葉樹の森を守りたいし、再生したいと思っています。私たちの力も足りなくて、まだまだその技術が全然追いついていないのですが、特に私は、研究所での最後の時期に広葉樹林化という技術開発プロジェクトに携わっていました。人工林を広葉樹に戻す、経済林として人工林を維持できないところは、できれば、もとあった林

に戻したい、その多くは元来広葉樹林なわけです。その際に、できるだけお金をかけないでやろうとすると、よく言われる天然更新でできないかという話になるわけです。実際にその研究をしている中で、あらかじめ、ある程度分かっていたことでもあるのですが、それは簡単ではないことが明らかになってきました。人工林に一旦変えたところを元の広葉樹に戻すには、条件の悪いところも多い、それを天然の、自然のプロセスだけに頼ってやることは難しい、可能な場所もありますが、そういう場所は限られているということが分かってきたのです。そうすると、植栽も場合によってはこれから考えていくべきではないかということになります。もちろんコストはかかるのですが、森林環境税がある中で、それを活用するなどして、これから林地に広葉樹を植栽する場面が出てくると、私は強く期待しているところです。そういう意味で、将来に向けては、ぜひ多様な広葉樹の苗木を作っていただきたい、それもさまざまな問題について配慮した、遺伝的な地域性であるとか、地域の生態にちゃんと合ったもの。勿論、全国のものを上原さんが全部やるという話ではないとは思いますが、ただかなりの地域をカバーするとすると、そうした条件を意識した苗木づくりにぜひこれからどんどんチャレンジしていただいて、広葉樹については、今のところはすべて裸苗だという話ですが、コンテナ苗を作っていく場面もあるのではないかと期待するので、そういう技術開発にもチャレンジしていただけたらうれしいなと思います。

私のコメントは以上です。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございます。それでは、続いて、星さん、お願いします。

○星（コメンテーター） 苗木の今後のビジネスの将来について、苗木生産者の立場として考えますと、多分、針葉樹と広葉樹では違って、針葉樹は拡大造林時代の蓄積が今あって、それが今伐期を迎えていて、これから全体の基調としてはそれを利用していく。そこに再造林していく基調は変わらないので、針葉樹は当面需要が続いていくのだろうなと。コンテナ苗の生産をどんどん推進していく。あとは、今後、人手がいま現に足りなくなっている、下刈りの部分をどう省略するか、どういった性質の苗木を作っていくかになるのだろうなと思います。一方、広葉樹は、いま上原樹苗さんで生産されている需要は今後引き続きあって、それに加えて、里山に近い民有林をこれからどう扱っていくのかにも大いに関係してきているのではないかなと思います。

実際、私のふるさとの喜多方市の近辺で民有林を見ていると、なかなか利用が進まな

い。それは集落が高齢化して、山の手入れがむずかしくなっていて、伐採、再生林が困難になっているという状況で、山も手入れが不足になっていく。それからそれに接続している田畑も耕作放棄地になったり、荒廃農地になったりしてしまっていて、そこを施策として、農と林でどう取り扱っていくかが省内でもいま議論されていると思うのですが、そういうところに広葉樹を投入していく潜在需要は恐らくあると思うのですが、それが顕在化して、そこにどう供給していくかはこれからわからないのですが、いずれにしろ、その一つの候補として広葉樹は有力なツールになると思うので、それは日本全体で考えなければいけない問題ではあるのですが、潜在需要としては大いにあるとあって、それが将来のビジネスにつながっていく可能性はあるだろうなど、苗木生産の立場から日本の森林を見てみると、そのように感じています。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。それでは、次、大槻さん、お願いします。

○大槻（コメンテーター） なかなか苗木ビジネスの将来についてというのは私にとってはちょっと荷が重いところもありまして、どちらかというと、やはり上原樹苗さんの会社の雰囲気、あれが私にとってはとても魅力的に感じて仕方がないのです。やはり苗木ビジネス、いわゆる自然が比較的あるところ、田舎で行なえるという魅力。あれだけ最先端の技術をたくさん取り入れて、それに触れられるという魅力。それと、森林の造成に関してはやはり国土保全等、社会の礎になる場所ですので、その本当に最先端、最初のところができるという社会貢献の魅力。たくさん魅力がある。しかも、それがあれだけ明るい雰囲気のできる会社というのは本当にすごいなと私は思っております。なので、やはりすべての苗木ビジネスに関わる方がああいう会社でいられることが、若い方が惹かれる大きな要素なのかなと思っております。これはやはり精神的なところで森林を支える大きな力になるのかなと思っております。ぜひこういう会社をどんどん広げられるようにまた活動していただければと思います。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。それでは小口さん、お願いいたします。

○小口（コメンテーター） 個人的な感想ということでよろしければ、たとえばバイオマス用の木材と用材用の木材というのは全然用途が違います。いまの森林では、切ったときにA材、B材、C材、出荷先を区分し、良材は用材にして、低質材はバイオマス利用等に用いていて、そこが崩れることはないかもしれませんが、最初から用途別に育て方を変え

ることも今後でてくるのではないかと考えております。ですので、将来の苗木の事業も、そういった情報をいかにキャッチして、先ほどの話にもございましたとおり、どういう苗木が求められているのかを造林する側と苗木を作る側が情報共有して行って、それを調整して出荷していける事業になるのではないかと考えております。

以上です。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。それぞれに特徴のある大変貴重なコメントをいただけたと思います。では、いまのご発言を踏まえて上原さんから。

○上原（業績発表者） いろいろ評価いただいて本当に恐縮なのですが、大体、皆さんの考えというか、私の考えと結構リンクしている部分がありまして、総体的に一まとめと言うと失礼に当たるのかと思うのですが、一まとめでお話し申し上げてしまいますと、やはり苗木ビジネスというよりも、苗木屋さんだけがビジネスをするわけではなくて、森林に関わる、森づくりに関わる人たちももちろんビジネスに参加していただきたいというのがありますし、当然、木材から受けた利益が実際山元に戻って、山の利益をまた苗木の利益に還元できる、そういった全体的な大きな枠組みというか、仕組みが一番大切なのかなと考えていて、確かにさまざま、今後、日本国内で、たとえば奥山の針葉樹の一斉林をこれからどうしようかと、さまざまいろんな問題が出てくると思うのですが、そういった中でわれわれ苗木屋さんにはどんな要望にも応えられる、もちろん知識もですし、種類もですし、そういうものを準備しながら、植える側の人たちや、林政、要は森造りを考えている人たちと二人三脚で進んで行って初めて、苗木ビジネスではなくて、すべてが成就できるのかなと考えています。

○鮫島（コーディネーター） どうもありがとうございました。すでに12分を超過いたしましたので、皆様のご発言はここまでということで本当にどうもありがとうございます。

最後に私から取りまとめをとということだったのですが、いろいろあります。まず、広葉樹がすごく出てきたなと思います。針葉樹は針葉樹、人工林は人工林でやっていかなければいけないのですが、やはり広葉樹林はたくさんあるわけで、そこがしっかり苗木を作りながら一緒に考えていくことが大事かなと思います。その中に里山は当然あるし、それから実際、地域、全国でやっていくためには、お互いに日本の山を将来どういう形の山、森、その後、木が使われていくのだということを苗木を作る段階から一緒になって考えていきたいと思いますということがとても大事なかなと思った次第です。つまり、先ほど発言が

ありましたが、全体の仕組みを作ることで、全体がきちっとつながっていることがとても大事であって、その最初の原点がまず苗木を作ることから始まるのではないかなと思っています。

これで取りまとめになっているかどうかわかりませんが、50年後に日本の森林がいまよりもさらにいい形で、とても人との距離も近づいて、愛される森林になっていけばいいと思います。そういう意味で、その原点を作る苗木ビジネスがさらに展開していけばいいかなというふうに思っております。時間を大分オーバーしてしまいましたが、本日は年末のお忙しいところ足を運んでいただきましてどうもありがとうございました。それから上原様、パネリストの方々、大変な貢献をいただきまして、どうもありがとうございます。皆さん、上原さんに拍手をお願いしたいと思います。(拍手)

どうもありがとうございました。以上でパネルディスカッションを終了とさせていただきます。

( 閉 会 )

○司会 演壇の皆様、有意義な意見交換をまことにありがとうございました。また、会場からもご参加いただきありがとうございます。以上をもちまして優秀農林業者に係るシンポジウムを終了いたします。

本日の結果は、内容を少し整理した上で、ほぼ全文を私ども農林漁業振興会のホームページにアップいたしますので、ご参考にしていただければと思います。

また、来週15日には水産部門のシンポジウムを広島市で開催いたします。さらに年明けの2月以降には今年度60回の天皇杯の部門から2例、長崎県と熊本県でシンポジウムを開催する予定でございます。いずれもオンラインでの視聴も可能ですので、ご関心のある方はぜひ参加していただければと思います。

なお、お帰りには、お配りしておりますアンケート用紙の簡単な質問にご記入していただければと思います。オンラインの参加の方々も、ズームから退室いたしますと、アンケートの記入画面に切り替わりますので、ご記入をよろしくお願いいたします。

以上でございます。本日はまことにありがとうございました。(拍手)

令和3年度（第60回）農林水産祭  
（第27回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」  
（東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者）

発行 令和4年3月

編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会

〒107-0052

東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル7階

TEL (03) - 6441 - 0791 (代)

FAX (03) - 6441 - 0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。